

通
倍
禪
話

北野元峯老師題字
高田道見老師提唱



特 18
769



京都女子大学
文学部



元海老油



本書公刊に就て

方今禪學の流行其極に達し、賈賤老少口々に相傳へ、禪書の濫作殆んど停止する所を知らず、其或く所多くは彼の「得胸中無事了假最平穩地也」といふを以て工夫の目的と爲す者の如く、禪と修を論ずる輩にして、此園内を脱する者は酷だ希有なり、殊に咽ふ可きは心理學的方面より禪を解する者、一切の知覺を去り、感覺を滅し、斯くて意識の顯在的活動を斷らざる所是れ即禪の悟境なりとて、動もすれば一種の催眠狀態を以て見性に擬せんとするが如き宗密禪師の謂ゆる凡夫外道の妄情禪に非らざれば大小兩乘の偏計禪に非らざるはなし、間々見神見佛などと稱して已見を出し、新奇を弄する者も、余を以て之を觀れば、面師の謂ゆる心意識の變態、念想觀の川没のみ、我が承陽古佛の語を借り來りて、暫く之を列せば、「この見解なほ小乘の學者に及ばず人天乘よりも劣なり、いかでか學佛法の漢さいはん、斯の如くにして俗を眩まし、譽を取り、天下の聰明を亂し、衆人の耳目を塗る、文逾々盛にして實増々衰ふ、余此に感ずる所あり、仍て思ふ今にして我が最上乘の禪風を舉揚せずんば、恐くは衆盲火坑に墮してまた救ふ可からざるに至らん」と、遂に一日此事を以て切に我が高田館主に訴ふ本書公刊の舉是に於て忽ち成る、夫れ徒に牝牡驥黃の外を見て、謂ゆる千里の駿性を棄つるは、世儒の嗤笑する所なり、讀者諸賢一たび本書によりて獲魚忘筌、眞に向上の禪風を識得せらるゝあらば、我が館主の本懐にして、兼て本書公刊の素願を完うせる者さいふ可し、猶ほ本書上梓に際し、前青松北野元峰老師が、特に巻頭の題辭を惠まれたるは深く余の感謝する所なり

明治四十一年九月 梧蔭 細川 道 契 識

通俗禪話第壹編

目次

第一	序言	一
第二	拈華瞬目の話	五
第三	刹竿倒却の話	一三
第四	禪宗の起原	二二
第五	斷臂求法の話	二九
第六	盡界一佛觀	三七
第七	生死去來	四五
第八	寒熱不到の話	五三
	正偏五位の談	
第九	臘八成道普說	六一
第十	直指單傳	七〇
	(以上)	

通俗禪話 第壹篇

第一序言

高田道見提唱

今日より予が述べやうとする所のものは禪ではなくして其の學理である古人も禪は參すべくして講ずべからずと云はれてあるが如何にも爾うである禪は文字を離れ言説を離れ心念を離れ思慮を絶してをる故に參すべしとあればとて參究し參問し參得する事ではない參ずるとは修するの義である修するとは行ずるの義である行ずるとは實地に坐禪をする事である正身端坐の修行が眞箇の禪定であるから坐禪といふてはないか然るを夫れ道理を研究したり不審な事柄を問詰したりすることが參の義であると思ふのは間違ひである若し問ふべきがあり答ふべきがあるならば其は禪ではなくして學である故に天童永平は同じく參禪は身心脱落なり焼香禮拜念佛修懺看經を用ひず祇管に打坐するのみと申された祇管に打坐すれば身心が自然に脱落して本來の面目が現前するぞと申された身心を脱

落するとは、人我見法我見煩惱障所知障三毒五欲五蓋六蓋等を出離解脫して身心の柔軟を得るのである、其の秘術が祇管打坐である、打坐は即ち正法眼藏涅槃妙心である、この妙心は即ち佛心印である、故に禪は是れ佛心なり、教は是れ佛語なりといふ、佛語は得て聞きもし聞はれもし講することも自由なれど、佛心に至りては言説を離れ、心念を離れ、思慮を絶してをるゆる、無言無説無示無識である、爲方がないから、釋尊は華を拈じて心印を示し、迦葉は莞爾と笑つて禪心を呈露せられた、その會と不會とは人々分上箇々面々にある事にて、唯獨自明了餘人所不見である、然るを夫れ入室して自己の見解を呈露し、師家の言説を拜聞し、又は普説を聞き、提唱を聴き、古則公案の意義を質すのが參禪ぢやと誤解してをる者もある、苟くも言説思慮に涉り、心念意識の通ずる所は聞思の二慧に屬して修禪の區域ではない、故に聞思は猶ほ門外に處するが如し、坐禪は乃ち歸家穩坐なりと、又華嚴經には門思修より三摩地に入るとある、三摩地は即ち王三昧である、王三昧は即ち眞如三昧である、眞如の都は吾々の本家郷にして言説の相を離れ、心縁の相を離れてをる、この離相寂然たる處に穩坐するのであるから、あつと見聞覺知を忘却しなければならぬ、然らば還源歸本息慮凝寂の處が禪の堂奥かと思ふ人もあらうが、爾うてはな

らぬ、然らば還源歸本息慮凝寂の處が禪の堂奥かと思ふ人もあらうが、爾うてはな
い、趙州和尚も云はれた通り、道は知にも屬せず、不知にも屬せず、知は是れ妄覺、不知は是れ無記、無記無想の關黑裏に昏睡して了ふのが大道の顯現といふのもない、爾うてあるから、研究しなければなりませず、講説しなければならぬ、この講説は且く有言を以て無言の當躰を知らしむるまでの事である、只この講説を聞き、禪理を會したからとて、夫れて禪を得たとは申されぬ、故に一切の禪書を讀み、禪説を聞くのは、入禪せしむるの方便に過ぎぬものである、永平祖師の語に、身心を決擇するに自から兩般あり、參師聞法と工夫坐禪となり、聞法は心識を遊化し、坐禪は行證を左右にすとある、古則を提唱し、禪理を談するは、人をして見佛聞法の益を得せしめ、其の心識をして理想界に遊化せしむるが爲めに、頓ては工夫坐禪の正行を營ましめんが爲めの誘引たるに過ぎぬ、故に予は暫く禪話と名けたのである、然らば予の是れより横説縱説する所のものは如何に高妙玄深なる道理界に走り、玄機大用の理談に入るとも、必竟假説の畫餅にして、飢を凌ぐの胡餅ではない、眞に飢を凌かんとならば、一時一刹那たりとも只管打坐を行じ

なければならぬ
 永覺外集の中に殘簡斷篇の中に向ひ聰明を以て領略して説得て滴水漏さざるも
 焉んぞ生死に敵せん達磨門下此事を提唱することは直に須らく觀智を泯じ道理
 を忘じて始めて始めて生死を出て祖燈を繼ぐべきことを要すと如何に聰明博解にして
 其の講説は滴水ほどの缺點もなく上手に利口に説き得て分明なるもその爲め妄
 分別妄知覺の生死心に敵對することはできぬ然らば如何にして生死に敵對する
 ことかてきるのであらうか其は觀智とて種々に觀念思察する所の智慧も泯滅し
 て智不到の心田地に入らねばならぬ何故かといふに其の謂ゆる觀智も一種微細
 の生死心であるからのこと又經律論疏の中に探り古則公案の逸話を拈弄して此
 れは向上底である此れは向下底である此れは斯うなり彼れは斯うなりと巧みな
 る道理の會を爲して一點の非難すべきものなきも洞山大師は語滲漏なりと賊め
 られてある其語に妙を究むれば宗を失し機始終を味ます濁智流轉すと今時隆ん
 に禪を談ずるの徒が多くは濁智の毒海に流浪してをる只禪語を學んだのみの事
 にて實地の修行を缺いてをるから説の時は悟に似たるも六塵の境に對する時に

は依然として迷ひを生ずるのである其んな事では何うして佛心が得られやうぞ
 祖燈が繼げやうぞ安身立命などは夢にだも得られはせぬその之を得るは只坐禪
 の一行である

第二 拈華瞬目の話

古來禪門に於て唱道する古則公案なる者の根元ともいふべきものは世尊拈華の
 話と云はねばならぬ又これを以て參師問法の標準と爲さなくてはならぬ又これ
 を以て自他宗共に許す所の宗源と致さなくてはならぬ俗士と云はず僧徒と云は
 ず男子女人貴賤老若の別なく苟も禪門に依りて安心落處を得たいと思ふ者は
 先づ此話の來由を知り此話の宗乘を明らめなくてはならぬ
 三國傳燈の祖師高僧方が論を造り釋を著はし口に説き身に修し佛に代つて大教
 を宣布せられたのも究竟する所は優に此話の宗眼を明らめ得られたからの事て
 ある

謂ゆる其の來由とは大師釋尊が彼の印度なる靈鷲山に在ましし時人天百萬大衆
 の爲に圍繞せられ四辯八音を以て説法化導せらるゝの折柄一莖の青蓮華を釋尊

に獻ずる者があつた釋尊は取敢へず其の蓮華を以て説法の高座に登らせ何事も仰せられず、と高く其の蓮華を右の手に拈じ擧げて百萬の大衆に示された思ひ懸けもなき所へエツと默示せられたものであるから百萬の大衆何れも忙然に取られ互に顔と顔とを見合はせ溜息をも吐かず聲咳をも爲さず一ら視線を釋尊の方へと注ぎ何ぞ仰せあるかと耳を澄し息を殺して待ち居るけれど一向に何事をも仰せられず又大衆の中にも一言口を開く者もない拈華瞬目とあるから釋尊の方でも瞑目して居られたのではない誰ぞ我意を會する者があるかとしてデロツと大衆の方を見詰められたのである

時に一人一番上座の大迦葉のみが莞爾と笑はれた傳にも金色の頭陀破顔微笑するとある微笑といふのであるからケタ〜と大笑せられたのではない、ホンの莞爾と微笑を漏らされたのであるそれが世尊の御目に留つたものと見え是に於て釋尊我意を會したる者は大迦葉一人のみと言はぬ許りに初めて金口を開かせられ御聲高らかに

吾ニ正法眼藏涅槃妙心有リ摩訶迦葉ニ付囑ス將來ニ傳持シテ斷絶セシムルコ

ト勿レ

と宣言せられた後世に及んで無門比丘が此話を評し若し百萬の大衆が同一時に微笑したならば正法眼藏を誰に付囑せられたであらうか若し又一人も微笑する者が無かつたならば如何にして此の正法眼藏を付囑せられたであらうかと申した事もあつたが兎にあれ此話の來由は之が其の權輿である尤も正法眼藏の付囑は是れより以前多子塔の前に大迦葉と初相見の時己に了畢して居たので雲山會上の拈華は只その披露に過ぎぬともいふ天童永平の密語に依れば正しく多子塔前初相見の時佛衣佛法を付囑せられたと信じてをられ禪林類聚の著者も亦其説を成してをる

然して佛祖統紀を見るに王荆公が佛惠泉禪師に向ひ世尊拈華の事蹟は何の書典に出づるので御座るか藏經の中には左様な事柄が載せて御座らぬかと申したればイヤ夫れは大梵天王問佛決疑經に載せてあると答へられたこともある又その青蓮華も大梵天王が獻じたのぢやとも申してあるさて其の經中なる彌累品第十二の文に

爾時二世尊梵王ニ告テ言ク梵王謂ニ聽ケ夫レ迦葉ヘノ付囑密法ハ諸佛甚深
竟ノ正法也凡ソ血氣有ル者各具セストイフコト無シ各具スト雖モ修セザル者
證セザル者ニハ顯ハレズ

と申してある然るに古來此經は大藏經の中に入て居らないから偽經である其の
偽經に在ることを根據として唱道する禪宗は邪教である異端であるぞと誇る者
あるされと設ヒ支那に於て取纏められた大藏經の中に入藏してないからとて夫
が直に偽經であるといふの證據にはならぬ元來支那傳來の大藏經なるものは幾
多の三藏法師が長年月を経る間に少しつゝ五印度の地に散らけて居た梵經を拾
ひ集めて翻譯したもの入藏せられなかつたも經も數多あつたに相違ない故に入
藏せられてないからとて夫れを直に偽經ぢやと斷ずるのは大早計の至りと云は
ねばならぬ況や支那へ傳來せられざる經文が何程あつたかも知れぬ南方所傳の
藏經と北方所傳の藏經と異なる所あるを見ても明瞭なるのみならず印度に於て
隱沒せし經文が何程あつたかも知れぬ然るを支那所傳の藏經にないから偽經で
あるとの非難は尤も淺薄極まる愚論と云はねばならぬ向來明教大師は增經の贊

に涅槃經の文句を引證して迦葉尊者へ大法付屬のことを囑せられてあるがこ
れも御苦勞の至りと云はねばならぬ全体東土傳來の三藏經なるものは東漸の靈
文又は殘簡斷篇とて切れ々になつてある世尊說法の斷片と云はねばならぬ又
如何に世尊の說法であるからとて細大漏さず筆記結集せられたとは信じられな
い何程漏落になつてあるかも知れぬその殘簡零墨の中に向つて一生懸命に蚤
取眼を以て何經には斯うある何論には斯う書いてあると其の文句許りを並べ立
てるといふのが佛教學者の通弊である吾が禪門からは夫等の人達を文字法師と
嘲けるのである其んな小さな料簡を以て佛祖正傳の大宗門を嘲けるといふは恰
も螻蟻の車轍を拒まんとする様なものである又何等の見識も具せざる禪門の流
弊は他の謗言を聞いて眞に然るかと思答だにできぬ也人よしも古來數々あるこ
となれど其は畢竟自の宗旨を知らぬからである明眼の人に逢はぬからである參
學に眼が聞けぬからである昔しの世ならば江海に遊び山川を渉り師を尋ね道を
訪うて參禪を爲すといふので一言半句の眞訣を聽くにも容易な事ではなかつた
又之を傳へむとするにも其師たる人は千辛萬苦を嘗められたものぢや

然るに今の世は交通機關が完備して見ず知らずの能化所化が、この機關を利用して新に靈山會上の物語が出来るといふは、實に千生萬劫にも値ひ難き良縁なりと云はねばならぬ故に今日は拈華瞬目の宗乘に就いて一場の提唱に及ぶことである

謂ゆる拈華の宗乘とは如何なるものであらうや、この拈華は實に釋迦大師一代の全身全力と云はねばならぬ如何に夫れ十力四無畏四辯八音四智圓滿無礙の大智力を具したまへる大覺法皇の佛陀にても、盲偏理圓の法則に外るゝことは出来ぬので説いても説いても説き盡されぬ所に至りては不可説不可説不可稱不可思議と謂つて舌を捲かれたのである、何うもこの言舌といふものは偏頗なもので何の様に思つても圓融無礙なる大道理を言ひ顯はすことが出来ないソコで事事無礙法界の道理に則り、圓同太虛無欠無餘の理體を顯發するが爲には、借事顯理の方便に由るより爲方がない、故に靈山に在りては拈華に事寄せて其の宗本を顯はし、曹谿洞山百丈臨濟に至りては拈鏡豎拂となつて來たのである

十方依正一塵の中限り無き遮那の轉法輪といふやうなもので、釋尊拈華の當處に

於ては盡十方盡三世盡法界を究盡せられてある、三世の諸佛十方の如來、三乘四果三賢十聖も拈華の一葉に蓋覆せられ、三乘十二分教八萬四千無量の法門も、拈華の一塵に包容せられてある、三途六道の郡類四生十二類の含識有情も拈華の一葉に含攝せられ、人天百萬の大衆は申すに及ばず、拈華の釋尊も亦この一華に蓋覆せられて、三十二相八十種好の片影だも見えぬ、此の時節只是れ千重萬重萬々重の優曇華のみである、故に永平高祖この拈華を舉示して左の如くに拈提せられた參學の人眼晴を活開して宗意のある所を取せられよ

イマ釋尊世尊ハナノナカニ身ヲイレ、空ノナカニ身ヲカクセルニヨリテ鼻孔ヲ
 トルベシ、虚空ヲトリ、拈華ト稱ス、拈華ハ眼晴ニテ拈ズ、心識ニテ拈ズ、鼻孔ニテ
 拈ズ、拈華ニテ拈ズルナリ、オホヨソコノ山河大地日月風雨人畜草木ノイロイロ
 角角拈來セル、スナハチ是レ拈優曇華ナリ、生死去來モ華ノイロイロナリ、華ノ光
 明ナリ、イマワレラカクノゴトク參學スル拈華來ナリ

拈華の宗旨は斯くなるものであるから、一代時教の中にも收め納るゝことが出来ないてあらう、何故かといふに一代時教はこの拈華の中に在るからのこと、釋尊の

迦葉に付囑せられたのは此の大優曇華である

世尊は如何にしてか此の拈華の大法を付屬せられ、迦葉は如何にしてか此の大法を嗣續せられたであらうか、并は即ち瞬目破顔の刹那にある世尊の瞬目とは即ちデロリである、迦葉の破顔とは即ちニツコリである、只夫れ顔と顔眼と眼デロリニツコリ、目擊道存顔顔相對して中に影像なし此の處に無限の妙趣がある、以心傳心證契即通も此の目元と目元とにある華の光明も華の色香も此の刹那に辨知せられたのである、世尊のたまはく

我ニ正法眼藏涅槃妙心有リ摩訶迦葉ニ付屬ス

と此れは是れ人天百萬衆に對する御披露の一言に過ぎぬ、拈華是れ正法である、拈華是れ眼藏である、拈華是れ涅槃妙心である、拈華是れ三乘十二分教である、拈華是れ金縷の僧伽梨衣である、拈華是れ諸佛の法印である、拈華是れ釋迦大師の佛心印である、この佛心印は人々具足箇々圓成底である、眞に之を修し之を證して世尊拈華の端的意を了知するものがあらうならば、世は如何に未代なりとも靈山の一會儼然未散である、圓明國師即ち此の本則を拈じたまひ

道フコトヲ見ズヤ常在靈鷲山及餘諸住處大火所燒時我此土安穩天人常充滿ト
タ、靈山會上ノミ所住處トイフニアラズ、アニ梵漢本朝モマタモル、コトアラ
ンヤ、如來ノ正法流轉シテ一毫髮モ欠クルコトナシ、モシ然レバコノ會ハ靈山會
タルベシ、靈山ハコレコノ會タルベシ、タ、諸人ノ精進ト不精進トニヨリテ諸佛
頭出頭沒セルノミナリ、今日モ頻リニ辨道シ子細ニ通徹セバ釋尊直ニ出世ナリ
タ、汝デラ自己不明ニヨリテ釋尊昔日入滅ス、汝デラスデニ佛子タリナンゾ佛
ヲコロスベケンヤ、ユエニ急ニ辨道シテスマヤカニ慈父ト相見スベシ、ヨノツネ
釋迦老漢汝デラトトモニ行住坐臥シ汝デラトトモニ言語伺候シテ一時モアヒ
ハナル、コトナシト

如何にして釋迦老漢と坐臥行住することが出来るであらうか、仔細に參究工夫すべきである

第三 刹竿倒却の話

諸仁者、禪教一味なりといへども禪者と教者と、おのづから其の別なることを知らねばならぬ、已に別なるが故に禪學と教學とは古來その趣きを異にしてをるので

ある、その異なる所以は法の上に非ずして人の上に在るので、この人法を會通して一如とするのが禪學の主眼とする所である、その人法を會通するとは云何なる事かといふに、法は不増不減なれども人の上には差別増減がある謂ゆる法とは法性である眞如である、正法眼藏涅槃妙心である、之に迷ふものを凡夫といひ、之を悟るものを賢聖といふ、その迷ひを轉じて悟りの道に向ふものを人といふ、此人に利根と鈍根とがある、之を差別して或は聲聞といひ、緣覺といひ、將た菩薩といふ、此等學人の爲に説かれしものを經律論の三藏といふ、この三藏を一代時教といふ、之が即ち佛の教といふものぢや、この教の義理文句ばかりを穿鑿して一生の人身を過すのが教者にして直にその教體に通達せむとするのが即ち禪者の本領である、今此に拈提せむとする所の刹竿倒却の語の如きは、教者の夢にだも知らざる所の公案と云はねばならぬ、併し耳あり眼ある教者ならば、之を聞き之を見ざる譯でもあるまいけれど、其宗乘の那邊にあるかを探り深く之に參ずるものならては知つたとは許されぬ譯である、この公案の由來する所を原ぬるに

西天の第二祖阿難陀尊者といふは、迦葉阿難とて、釋尊第二の御弟子に在しますの

て、迦葉尊者が世尊の法藏を付囑せられて後、その法藏を阿難尊者に傳持せられたのであるが、參學の人は此に深く氣を著けねばならぬことがある、この尊者は解脫王の王子にして世尊の爲には御從弟に當るので、如來成道の夜に誕生なされたのぢやと申す事である、何うも非常なる美男子にて十六の大國中にも肩を並べる程のものが無かつたとある、此人が稍々長じられてから出家して佛門に入り釋尊の弟子とならせられた、何うも餘りの美男子であるから、女人が戀慕して仕方がなかつたといふ、或時は摩登伽といへる姪女の爲に想ひを懸けられ、魔術を以て戒躰を破らむとする女難にね逢ひなさらむとする危きこともあつて、疾く世尊の天眼通に照らされ、幸くも其難を遁れたまひ、夫れから世尊の爲にメツキリと窺められなされたのがア的首楞嚴經となつたのである、その首楞嚴經は佛經中の哲理ともいふべき理窟深いお經文であるから、佛學を研究し、殊に禪學を研究するの人に在りては、是非とも拜讀しなければならぬ、あの様にまあ道理責めに責められなされたのであるけれども、その楞嚴會上に於ては悟入といふ場合に到られなかつたのである殊に、此人は二十年間も常隨侍者として佛の説法は残らず記憶して居られた

といふ故に多聞第一と名く、その未だ侍者となり給はぬ以前華嚴會座の説法まで悉く記憶して居られたといふが、是れは御隨侍中に親しくお聞きなされたのである。是くの如く、如來一代の説法は悉く憶記して居られたにも拘はらず、如來の御在世中には遂に悟入がなかつたので、如來のお涅槃に入らせられた時などには、悶絶して地に倒るとある、斯うして見ると、聰明博達と入證悟道とは全く別なものであるといふことを知らねばならぬ。

華嚴經に「譬へば貧窮ノ人ノ他ノ寶ヲ算ヘテ自カラ半錢ノ分無シ、多聞モ亦復是クノ如シ」とある多聞にして聰明博達なるは他人の寶を計算して居ると同じ事である、勞して功無きものぢや、祖門の本領とする所は、空しく他の寶を計算することせず、設ひ少分にては其の寶を手に入れる事に勤むるのである。譬へば世間の空想家が口に任せ筆に任せて大きな事を言ひをれど、金錢の點に至りては何時素寒貧て、その内情を探れば實に哀れなものなれど、之に引替へ彼の實業家は眼に一丁字なきものたりとも、金錢を自由にして優々得々たるが如きものである。最も學問もあり資産もあるといふ人は、鬼に鐵棒を持せたりやうなものである。されど

教者は生涯文字教相ばかりに頭を突込て悟道證果の一大事を心にかけず、釋者は多く入證悟道の一方にのみ傾いて教相判釋のことには左のみ心がなないので、兩者共に完全を缺くといふのが、古今の通患である。佛在世に悟道證果の人は、淨山にあつたけれど、多聞博達の阿難尊者が、如來御在世のうちに悟入の無かつたのは實に遺憾の至りと云はねばならぬ。

何れも御承知の通り、印度の人は記憶力が儲なものと思え、如來の説法は筆から眼にてはなく、口から耳へと傳へになつたので、如來自から筆を執りて御著述なされた經文とては、一卷もないのである。然るに自から聞いたものは、心開意解して更に不足は無けれど、之を將來に傳へるには、文筆の力を借りるより仕方がないのであるから、如來の大法藏を付囑せられた迦葉尊者が、一肩に其の責任を擔ひ、五百羅漢等の諸弟子を畢婆羅窟に集め、爾うして法藏結集の大事業を起された。此等の諸弟子は何れも證果の大阿羅漢のみである。

然るに其時阿難尊者は未證果であるにより、其の窟中に入り、聖衆の中に列席することを許されなかつた所て、阿難は夫れが悔しくて堪まらんものであるから、平素

の多聞博識はスツカリと之を放擲して、一生懸命に工夫坐禪せられたれば速かに阿羅漢果を證せられたソコで阿難が夜半窟中に入らんと乞はるゝ時迦葉の申さるゝに汝已に阿羅漢果を證したならば三明六通八解脱を得た筈であるから神通を現じて鑰の穴より入れよとのこと時に阿難は直に小身を現じ、その鑰穴より畢婆羅窟の中に這入られたとある之を阿難鑰穴の話とも稱して古來叢林に喧々囂々たる一問題である

且く道へ阿難の神通は云何なるものであらうぞ小虫の如くに父母所生の身軀を小さくすることが出来得るものであらうか神通なるものは果して斯くなるものであらうか阿難ならざる今日の我等には是くの如き業が出来ないものであらうかあるまいか此が研究の要點である

時に阿難が證果せられたといふので迦葉を始め他の諸大弟子も大いに歡ばれたとある何故かといふに、その博聞強記といふの點に至りては阿難に及ぶものが無かつたので、一器の水を一器に傳ふるが如くに餘さず漏らさず如來の説法を記憶して居られたのは即ち阿難であるからのこと、時に五百の羅漢は何れも阿難をし

て佛の説法を再説せしめ、爾うして之を一々筆記したいとこのことを結集長の迦葉に逼せらるゝものであるから、迦葉は自から阿難に向ひ何れも汝の再説を望むから左様に致すが宜からうとのこと、時に阿難は迦葉の密意を受け高座に登りて如是我聞一時佛在との標目の下に如來一代の説法を綿々密々に宣説せられた時に諸弟子が三種の疑ひを起し豫て聞きし所の佛説に少しの違ひもないものであるから、ハテな釋迦牟尼佛の再來せられたのではあるまいか他方來の佛が釋尊に代りて再説せらるゝのではあるまいか、但しは阿難が成佛せられたのではあるまいかと讚嘆措く所を知らなかつたといふ、大乘非佛説といへばいへば凡そ大小乗の經典は悉く文殊阿難の所説なりと云はねばならぬ、若し非佛説とすれば總に是れ非佛説若し佛説とすれば設ひ何人の口より出て手より造られたとするも悉く是れ佛説である、佛意を稟けて佛教を宣説するものあらば悉く是れ萬億分身の所説と云はねばならぬ、野禰が今日是くの如くに説き、諸仁者が是くの如くに聞く所以のもの、は全く是れ靈山の一會嚴然未散なりと深く歡喜の心を生ずべきである

阿難已に一重の關を透得して無生法忍を得たりと雖も、未だ最後の牢關を透得せ

られざるにより、法藏結集の仁には當りたるも、未だ傳法相續の仁には當り得ることが出來ないのである。諸仁者最後の牢關とは云何なるものなるぞ、古徳の語に「最後の一句始めて牢關に到る」とあり。要津を把斷して凡聖を通せず。と、阿難の悟入は且く最初の一句を透得せられたので、之を且く小悟といふ。法華經で申さうならば、三百山旬の化城にして未だ五百由旬の寶所には遠して遠してある。要津を把斷して凡聖を通せず、この田地に到るを大悟といふ。而して阿難はソモ云何なる場合に最後の牢關を透得し如來の大法藏を傳持せられたのであらうぞ、有る時迦葉尊者に向ひ「師兄ハ世尊ヨリ金剛ノ契ヲ傳ヘラレシガ其外別ニ箇ノ甚摩ヲカ傳ヘシゾト」迦葉尊者は己に機熟し時の到れるを知り、直に本分を拈提し、聲を勵まして「阿難」と呼ばれた。阿難聲に應じて「ハイ」と應諾せられた。迦葉又其聲に應じて

門前ノ刹竿ヲ倒却著セヨ

と阿難其聲に應じて忽然大悟せられた。此時佛衣が直に阿難の頂上に蔽はれたと

ある、この佛衣といふは大哉解脱即、無相の福田衣である。刹竿倒却とは西天の法に佛弟子と外道と論義する時兩方に刹竿幢を立てる、負けた者が其幢を倒すのである。文辭の出處は、期れ若し強て義解すれば、阿難の問端迦葉の答話は兩方に高く刹竿幢を建立した様なものである。勿論事物の刹竿を立てられたのではなけれど、阿難呼喚に應じて「ハイ」と應諾の所已に證契即通、師資面授の大道が開通せられてある。然らば刹竿倒却著の聲に應じて大悟せられたのではなく、阿難と召し、ハイと應諾の處に大悟せられて二面裂破であるから、六根門頭の刹竿は已に倒却せられて仕舞つたので、迦葉の刹竿倒却著は印可證明の語である。この刹竿は迦葉の刹竿であるか、阿難の刹竿であるか、イヤ勝敗ではなく、已に議論が盡き、心處が通じたのであるから、兩箇の刹竿共に倒却著である。向上底即ち云何ん、正當恁麼の時、只刹竿の倒却なるのみならず、山河大地、十方虚空共に倒却して眼界一塵の立すべきものがない。それこそ八萬四千條なる無相の福田衣が、おのづと阿難の全身に蔽はれたのである。併し此の時節に到ることは容易ならぬ一大事である。此の時節が到來してこそ西天の第二祖

として如來の法藏を迦葉より付囑せられたのである、是くの如きは昔し話しては
ない、今日の諸仁者も一たび此の快活なる時節が無くてはならぬ

第四 禪宗の起原

門外漢の批評を聞くに、禪宗の元祖は達磨大師であると申して居るけれど、爾うて
はない、禪宗の元祖は確かに釋迦牟尼佛である、牟尼佛以前から四禪八定といへる
世間禪は、印度の婆羅門教中にも行はれて居たので、其の目的とする所は、生天の樂
を得たいといふのであるけれど、其の天なるものは、縦ひ非相非々、想處とて、天の絶
頂なるも、尚ほ三界の内を出てないので、眞實究竟の解脱に到らぬから、牟尼世尊は
別に解脱の眞理を案出して、自からも其の三界を出離し、他をしても三界出離の法
門を開示せられたのである、謂ゆる三界とは、欲界色界無色界にて、六道も二十五有
も此内を出てないのである、この三界六道を教相の上から、客觀的に見て法門を建
立するのが、教宗にして之を主觀的に見て法門を建立したのが禪宗である、禪は佛
心にして、教は佛語である、この佛心佛語は如來在世からあるもので、別に宗名とては
無かつたのであるけれど、禪教の二宗は、最初から兩立して居たのである、故に教の

中に禪があり禪の中に教があるので、この二者は不離不即である、元來不離不即の
ものであるから、禪は教に依て顯はれ、教は禪に依て陰せられたのである、禪教もと
同體であるから、禪あつて教なきものは、眼あつて足なきが如く、教あつて禪なきも
のは、足あつて眼なきが如きもので、俱に不具的の佛徒たるを免かれないのである、
故に上代に在りては、禪教併立して學得せられたものなれど、末代に至りては、あ
つと禪教が別立せらるゝ様になつて來たのである

西天竺の第一祖大迦葉尊者より第二十七祖の般若多羅尊者までは、禪教が同一に
學得せられ、戒定慧の三學が平等に行取せられたのであるが、西天の二十八祖菩提
達磨大師が梁の世に支那へ渡來して見られた所が、教相佛法のみが弘まつて居て、
肝心なる佛心が傳はつて居なかつたから、教相の睡眠を醒まして佛心の眼睛を活
開してやるには、逆も尋常の手段に行かぬと看破せられたものと見ゆ、手に經卷を
取らず、口に經卷を講せず、面壁打坐が直に佛法の正業であると示されたものであ
る、尤も渡來の後に至り始めて此の手段を取られたのではなく、御渡航以前より已
に震旦の様子を耳にせられ、其の用意にて來られたものに相違ないのである、其の

大師が印度に居られた頃も已に正法が衰へて、六種の宗旨が弘まつて居たのである。大師は雄辯滔々、一々其等を論破せられ支那に來つて復た痛く教宗を打撃せられたものと見える。

達磨大師の渡來せられた當時の天子を梁の武帝と申す。この天子が却々の佛信者にて、自からその玉體に佛袈裟を着して佛經の講話をせられた程のれ方であつた。今の世に行はれてある施餓鬼法會式の如きも、武帝が自から組立られたのぢやさうである。其他多くの僧尼を度し、多くの寺院を建立して功德善根を修せられた程の人なれど、其頃までは未だ正傳の佛法が渡つて居なかつたので、只禪味の扱けた教相佛法のみを珍重して居られたのである。この教相佛法を始めて漢土に弘めたのは後漢の明帝である。明帝が印度に佛法あることを知り、使節を派して迎へ來たのが葉摩騰竺法蘭の二梵僧である。其後次第に佛法が漢土に開けて、達磨大師渡來の頃までには經律論の三藏が渡り、且つ漢譯せられて三藏法師も多人數出來て居たのである。ソレで漢土の人たちが佛法は三藏以外になきものと思ひ込て居た所へ達磨大師が三藏以外に佛心印を傳持せられ、面壁坐禪の行持を勤められたもの

であるから、實は武帝を始め、三藏法師等が膽を潰して異端外道の如くに思つたのである。

始め達磨大師が梁の武帝に見參せられた時、武帝の問ひに、朕即位以來寺を造り經を寫し、僧を度したること勝て記す可らず、何程の功德ありやと申された。スルと大師は並に功德無しと刎ね付けられた。帝は驚愕して何を以てか功德無しやと再問せられたれば、大師此れ但た人天の小果有漏の因にして影の形に隨ふが如く、有りと雖も實に非ずと辨明せられた。人天の小果とは前にも申した通り、眞實解脱の法てはなく、漸く人間天上に生るゝまでの福報に過ぎぬので、夫れ以上出離得脱の大果報とするには足らぬ。有漏とは煩惱のことを漏といふ。生天の因には尙ほ漏失の煩惱あるを免かれぬ。譬へば弓の箭を空中に射揚げる様なもので、その勢力が無くなれば必ず地下に墜ちそ了ふ、その如く有爲の福報は影の形に隨ふやうなもので有るか如くなれども、其實が無いのであるから、應てまた三惡道に墮落しなければならぬ。故に其の様な功德善根は眞實佛法の功德とするに足らぬから、功德無しと答へられたのである。武帝は斯くも百尺斷崖より蹴飛ばかされて自己の立脚地を

奪ひ取られたものぢやから、最う堪えられなくなつたものゆゑ、獅子翻擲の勢ひを以て如何にあらんか是れ眞の功德と囃みつかれたスルと大師は泰然自若感みを垂れて淨智妙圓の體は自から空寂なり是くの如きの功德は世を以て求む可らずと聽へられた、造寺寫經及び度僧の如きは勞して功無き有漏の小因たるに過ぎぬのであるが、我が傳持せる正身端坐非思量の王三昧は淨智妙圓にして其の本體は空寂である、この空々寂々たる所に自づと清淨にして妙なる圓かな大智慧光明が赫々として照り輝いてをる、この蓋天蓋地の大光明は盡十方界を照破して、三塗六道の群類も一時にこの光明裏に攝取せられ無明黒闇の如きは頓と跡形もなくなつて了ふ、譬へば清淨の虚空に一點の浮雲もなく、明月の皎々として盡大地を照してをる様なもの之が佛佛正傳の大功德で御座る、斯の様な眞功德は未だこの漢土に傳へられてないから世間に求むることは出來ないてありませうと言はれたのであるけれど、武帝には恐らく之を聞き取る耳が無かつたらしいです、若し武帝にして之を聞き取る耳があつたならば、此の一言下に省慮して正傳三昧の門に入られなければならぬのであるけれど、何分教相て固めた頭腦であるから、馬耳東風の有

様であるでも、流石の武帝ぢや、以上は不得要領にし了つたのぢやけれど、モーッ打着つて見やうと思ひ

如何にあらんか是れ聖諦第一義

實僧は尋常ならぬ聖僧なりと見受けるが、聖人の諦了せられた佛法の第一義は何んなもので御座らうナ、この一言で前の答話が馬耳東風であつたといふの證據が明白である、第一義は已に説き得て分明である、然るに重ねて、事新らしげに此の問端を發するといふは、餘程の鈍馬耳聾の漢と見ゆるだから、達磨大師は

廓然として無盡

佛法の第一義で御座るか、帝にはまだ凡聖の階級を眺めて居られる様ですナ、我が正傳する所の佛法は超凡越聖で御座る廓然とホガラカにして空々寂々凡聖の影だも見えませぬぞ、凡聖迷悟の跡あるは、俗諦差別の法門、眞諦平等の慧内は淨智妙圓、其體空寂なりと申上げたては、御座らぬかと答へられたのである、斯く申されたけれど、帝には依然として馬耳東風、其の言葉のみが聞えて其の意味が通じなかつたものと見え

朕に對する者は誰ぞ

ても貴僧無垂ぢやと言はるゝけれど現に夫れ此方に對面して居る人は誰れて御座らうナ聖人が無いことはない現に有るては御座らぬかと何處へまでも對待の見解が付き纏うてをる大師も最早此んなれ客には愛想が盡きたものと見ぬ

不識

と大喝一聲して其座を立ち去られた陛下の如き人とは逆も話しにならぬから最う休めに致しませう方木圓孔に投ぜずて四角な木は何うしても圓い孔の中へは這入らぬ夫れから達磨大師は臂を掉つて魏の少林寺に至り九年の間面壁坐禪の正業を勤められて居たのである時に神光といへる非凡の高僧が伽藍神の勸告に依り大師を少林に尋ね眞實求法の精神を顯はすが爲めに左腕を斷つて達磨の面前に捧げその弟子たることを許されて正傳の佛法を相續せられ此外にも眞箇の弟子が出来て漸次この禪宗が弘まつたのである故に佛法は支那にて面目を一新したものである

第五 斷臂求法の話

大法を求めて安心決定せんが爲めに左臂を截斷して求法の熱誠を其師に捧げたといふことは實に空前絶後の實例と云はねばならぬ法を重んずるものは是くの如く身を輕んじなくてはならぬされど今の求法者に向つて斷臂せよといふのではない唯だ斷臂の精神百萬分の一なりとも學び得て參禪の修養とし千古の龜鑑として貰ひたいと思ふのである併し最早この話しは誰も能く知つてをる事柄で別段事新らしげに持出すほどの事にもあらねど一回舉着すれば一回新なりといふこともあり故きを温ねて新らしきを知るといふこともあるにより蒙古の精神を以て天下の諸禪士と共に斷臂の状態を語つて見たいのである釋尊からの系統によれば第二十九祖に當り支那に於ての法系は第二祖に當るのて菩提達磨大師の御弟子にて始め神光といひ後に慧可と改名せられた人此人が達磨大師に參じ求法の眞情を顯はすが爲めに左臂を截斷せられたのである其名を神光とせし由來を尋ぬるに其父母子なきが故に久しく神に縞りて一子を授けられよと求めて居た所が一夕異光其室を照らした奇瑞を感じたさうである其後

間もなく懷妊して、目出度も玉の様なる一男子を設けたのである、異光の室を照せし因縁を以て幼名を光と稱して居たのである、長ずるに及んては、伊洛に居して群書を博覽し、家業を事とせず山水をのみ愛して居られた

時に歎じて申さるゝやう、孔子老子の教は禮術の風規のみ、莊子周易の書は未だ妙理を盡してない、獨り佛陀の教のみ、人生宇宙の妙理を究めてある、之を専修するに俗中に居しては及ばぬ事なりと悟り、龍門といへる地名に香山の寶靜禪師といふ高僧が居られた、此人に就て出家得度を爲し、天下の知識に就いて普ねく大小乘の教義を學んでをられたが、一日般若經を見られて大いに自覺する所があつたものと見ゆ、夫れからといふものは、都て經論を閱覽することを止めて晝夜坐禪三昧に入れた、夫が一週間や二週間の藥鏝願心てはない、而も八年の間、ブツ通しに坐禪のみせられた、何も却々根氣がよい、我々共の逆も企て及ぶ所でない、斯て八年も寂黙の中に坐禪して居られたが、ひとりの神人忽ちに現はれて告げるに、將に證果を受んことを欲するならば、此に滯らずして南方に偉人を尋ねよ、果して其求むる所の大道を證得するぞと、時に神人の助けあることを知て、神光と改名せられたので

ある、この神人とは何物であらう、此は帝釋天か其他の護法善神であらう、とて其翌日に至り、突然にも堪られぬ程の頭痛がして來て、非常に苦んで居られる、其師の寶靜禪師は醫師でも迎へて治療を施さんと心配して居られた所が、忽ち空中に聲あり、此れは神人の聲であらう、是れ即ち換骨なり、常の痛みにあらずと、師も大いに怪んでをられた、スルと神光は夫れまで黙して居られたのである、けれど卒に神人を見たことを師に白された、ソコで師は其の頂骨を見られしに、五峯、泰山、花山、靈山、嵩山、恒山の秀出せるが如しとある、師は之を見て、汝が相は吉祥なり、當に所證あるべし、神人の汝をして南せしめんとするものは、斯れ則ち少林の達磨大師なり、必ず汝が師ならんと、早速香山を發足して嵩山の少林寺に參向せられた、此れは達磨大師渡來の翌年にて、大通二年臘月九日の事である、が神光大師は寒風凜々として膚を刺すが如くなるも、思ひ付きしが吉日なり、暫時も猶豫すべきにあらずと、急立つ胸を押へ、少林寺の門庭に到り

頼まう、何うぞ掛錫を許して下され、何うぞ入室を許して下され、求法に切なる僧て御座るぞ

と頻りに懇願せらるゝけれど、大師は一向振り向きもせず、面壁坐禪してをられた。如何に頼んでも返事だにして下されぬ、何うも許しのないのに、這入り込む譯にも行かず、去ればとて引返し來日を待つといふ譯にも行かず、殆ど進退に苦んで居られた。今の叢林の如く、且過寮があるといふてはなく、衆寮があるといふてもなく、門前に下つて大福餅を買食する譯にも行かず、腹は透いて來る身體は戰慄て來る、日は將に西山に沈んで薄暗くなる、其内に餛飩粉の如き雪が降り積る積るに、隨つて寒氣は骨に徹へて來る、その積雪は腰を埋むるほどに至るも、達磨大師は一向に知らぬ振りして面壁打坐、あゝ無情なり、まあ何うして入室を許されないのであらうぞと、潜かに血涙を流して大師の許しを待つてをられた……此んな辛抱が人の身を以て出來るものであらうか、放身捨命とは實に此等の事であらう、永平祖師は行持の卷に左の如く、神光大師の求法を批判せられた。

天大雨雪ナラズトモ、深山高峰ノ冬夜ハオモヒヤルニ、人物ノ窓前ニ立地スベキニアラズ、竹節ナホ破ス、オソレツベキ時候ナリシカアルニ、大雪匝地理山没峰ナリ、破雪シテ道ヲモトム、イクバクノ險難ナリトカセン、ツヒニ祖室ニトツクトイ

ヘドモ入室ユルサレズ、願眊セザルガゴトシ、コノ夜ネブラズ坐セズ、ヤスムコトナシ、堅立不動ニシテ、アクルヲマツニ、夜雪ナサケナキガゴトシ、ヤツモリテ、腰ヲウヅム、アヒダ、オツルナミダ、滴滴コボル、ナミダヲミノニ、ナミダヲカサヌ、身ヲカヘリ、ミヲ身ヲカヘリ、ミル

とは善くも神光の心情を穿たれた、時に神光は更に思はるゝやう、大般若經を案ずるに、常歸菩薩は般若を求むるが爲には、骨を敲いて筆と爲し、髓を取て紙と爲して、般若を書寫せられたといふ事もある、又報恩經を案ずるに、須闍太子は、自身の肉を割いて父母に供養し、以て一時の餓を救はれたといふ事もある、又大寶積經を案ずるに、大師釋尊は因地に法を求むる時、髮を布いて燃燈佛を供養せられた事もある、又金光明經の捨身品を案ずるに、世尊の因地には、斷崖に投じて、虎の餌食になられたこともある、又涅槃經を案ずるに、釋迦大師は雪山童子たりし時、四句の偈を求むるが爲め、羅刹に身命を施して、其餓を濟はれたこともある、古へ尙ほ此くの若し我、又何人、予と志氣いよ、勵みて達磨大師の許しを待つてをられた、さては如何に無情と思ひし、達磨大師も、鐵石の如き神光の立志には、聊か

一顧の慈愍を催ふされしものと見ゆ、翌朝曉天の頃に至りては、若し凍死にてもしては可愛さうなりと思はれしものか、達磨の方より口を開かれ

汝久シク雪中ニ立ツ、當ニ何事ヲカ求ムベキヤ

と問はれた、時に神光は、ヤン嬉しやと、嬉し涙に咽び、倍々涙の上に涙を流して白し上げらるゝやう

惟ダ願クハ和尚慈悲、甘露門ヲ開イテ、廣ク群品ヲ度シタマヘ

何うぞアナタ大慈大悲を以て我が爲めに、實相微妙の法門を開きたまひて、我身お

よび一切衆生殊には東都の衆生を濟度して下されませ、私のお願ひと申すは、只々

これのみて御座りますと陳情せられたのである、その時達磨の申さるゝやう

諸佛無上ノ妙道ハ曠劫ニ精勤シテ行ジ難キヲ能ク行ジ、忍ビ難キヲ能ク忍ビタ

マヒシナリ、豈夫レ汝ノ如キ小徳小智、輕心慢心ヲ以テ眞乗ヲ冀ハント欲スルモ

徒ニ勤苦ヲ勞スルノミ

と謂つて憐れとも何とも白されず、又本の座に坐して面壁せられた、随分冷酷なる應接ではある、されど達磨は是れ大乘の法器なり、眞實求法の大士なりと見て取ら

れたものであるから、獅子の子を生むときは、之を萬仞の懸崖より蹴落すに、其子翻擲して親に向はゞ育て、子と爲し否らざれば育てずといふが、達磨も其の如く眞弟子を得たいとの大慈悲心より一旦は彼をして死地に陥らしめんが爲め、思ひ切て突き放されたのである、最う斯うなつては壁立萬仞、鐵壁銀山、寄ても附けぬことになり、心識思量の便りも絶て了ひ、言語文字の絲筋も切れて何うすることも出ない、即ち理路も觀智もスツカリ泯絶して了つたから、大死一番、大活現成して、濬かに利刀を把り、自から左臂を切斷して、達磨大師の前に放擲せられた、能ふことであらうか、能はぬことであらうか、古へ尙ほ然り我れ又何人ぞ僅かに言語文字の上にて、此事を耳目にするだも尙ほ寒毛の卓立するを覺ゆるてはありませぬか

達磨も斯くまで翻擲し來らうとは思ひ懸けもなき所へ、鮮血淋漓たる暖皮肉、暖骨髓をブツ附けられたものであるから、始めて是れ眞の法器なり、獅子兒なりと驚き且つ思はれたものと見え、漸くに言葉を和らげ

諸佛最初ニ道ヲ求メ法ヲ求ムルガ爲ニハ形ヲ忘ル、汝今臂ヲ吾ガ前ニ斷ツ求ム

ルコト亦可ナル在リ
 と是に於て乎始めて掛搭を許し入室を許されました爾れから八年の間左右に勤
 侍して親しく宗要を聴聞せられたとある求むること可なりとの言葉に依て又其
 名を慧可と改稱せられた是くの如きの精神を以て坐禪し求法せられたけれどま
 だ悟道の田地に到達せられなかつた悟道は眞に容易ならぬことである然るを夫
 れ今時尅期の坐禪を以て妄りに證悟を貪ぼるが如きは慧可大師に對して慚死せ
 ずには居られまい慧可達磨に向ひ諸佛の法印得て聞く可しやと問はれたスルと
 達磨は諸佛の法印は人より得るに非ずとて一言を與へられなかつた又慧可は尋
 常師に向つて説心説性せられるれども都て其非なるを説いて排斥せられ爲めに無
 念の心體を説かれなかつたとある有る時師に侍して少室峰に登臨せられんとす
 るに因み達磨の云く道何れの方に向て去る慧可請ふ直に進前せば是なり達磨若
 し直に進めば一步を移すことを得ずと慧可聞いて契悟せられたとある時に慧可
 我れ既に諸縁を息むと師に白された時に達磨漸滅と爲し去ること莫しや否や慧
 可漸滅と爲さず達磨何を以てか驗しと爲す慧可了了として常に知るが故に言の

及ぶべきにあらずと達磨時に印可して此れは是れ諸佛所證の心體なり更に疑ふ
 こと勿れと是くの如くに求法し是くの如くに勤勞し是くの如くに辨道して漸く
 諸佛所證の心體を得たりと印可せられたのである却々何うして尅期坐禪を事と
 する亂心狂氣者流の夢にだも知らざる所大いに謹慎して辨肯しなければならぬ

第六 盡界一佛觀

滿天下の諸佛子佛身に三種あることを知るや否や一を清淨法身毘盧遮那佛とい
 ひ二を圓滿報身盧舍那佛といひ三を千百億化身釋迦牟尼佛といふ一は理佛二は
 智佛三は事佛である而して此の三身を別體別佛と思ふや否や若し別佛の觀を爲
 せば未だ見佛聞法の人とは申されませぬぞ若し佛法の眞實義を了知せむとなら
 ば此の三身の一體なることを知らなければならぬ此の三身は伊字の三點の如く
 修羅の三目の如く鼎の三足の如く不離不即なるものである圖して示さば



斯うである、化身のことを應身ともいふ、此に一物あれば必ず體相用の三法を具せざるものはない、彼の火大を見られよ、熱の體と光の相と燒の用とがある、彼の水大を見られよ、濕の體と波の相と洗の用とがある、彼の人畜を見られよ、物質の肉體と五根の相と、五識の用とがある、其の如く一心にも亦不變の體と識變の相と分別の用とがある、而して用は必ず體と相とに因て起り、相は必ず體と用とを具し、體は必ず相と用とを具してをる、若し此の三大を佛身の上に約して見るときは、體は理にして空である、相は智にして有である、用は事にして有即空空即有である、理は虛空の無邊際なるが如く一切處に遍滿してをる、故に法身佛のことを遍一切處と翻譯してある、而して理の在る處には必ず智がある、智は能く理を觀察し事を照すの能力を具するものにて、火の物を燒き物を照すの功能があるが如きものなるに依り名けて光明といふ、この光明は理性の遍滿に伴ふものなるがゆゑ報身のことを光明遍照と翻譯したもの、已に理智の在る處には必ず事が之に従ふべきものである、而して事は千差萬別無量無邊なるが故に千百億化身といふ、千百億とは無量無數の義である、而して無量無數に變化するのは、無量無數の世界衆生に應同して濟度す

るが爲めである、故に之を應身佛と申した者、今の釋迦牟尼佛はこの人間を濟度せむが爲に人界に應同したまふものである、此の人界に應同したまふたる佛陀は釋尊一佛である、故に此の事佛の中には理佛も在します、智佛も在します、此の事を離れて智佛理佛が別に在しますと、思ふのは、未だ佛身の三即一なることを知らぬからである、彼の阿彌陀は智佛なるぞ、故に光明遍照十方世界といふ、彼の藥師も阿闍も、多寶も寶勝も、大日も皆智佛なるぞ、然るを別佛の如くに思ふは、三即一の法門なることを知らぬからである、昔し六祖大鑑禪師が三身即一の旨を説示せられたこともあるが、开は自身自性の中に向つて其義を明かされたのであるから、彼れは因位佛の義と見なくてはならぬ、今茲に述べんとする所のものは、果上佛の義である、即ち我等が本師の釋迦牟尼佛は、果上佛に在しますので、それを始成正覺の佛と思ふは、小乗の見知である、大乘より見たてまつる所の釋迦牟尼佛は、久遠實成の妙法身に在しますのである、彼の法華壽量品を見られよ

爾時に世尊諸菩薩の三たび請うて止まざることを知めし之れに告て言はく、汝等諦かに如來の秘密神通の力を聴け、一切世間の天人及び阿修羅は皆聞へり、今

の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出て迦耶城を去ること遠からず道場みちばに坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たるなりと然るに善男子我れ實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佉劫なり譬へば五百千萬億那由佉阿僧祇の三千大千世界をたとひ人ありて抹して微塵と爲し東方五百千萬億那由佉阿僧祇の國を過ぎて乃ち一塵を下さん是くの如く東に行いて是の微塵を盡さんが如き諸の善男子意に於て云何是の諸の世界は思惟校計して其數を知ることを得べしや否やと彌勒菩薩俱に佛に白して言く世尊是の諸の世尊は無量無邊にして算數の知る所に非ず亦心力の及ぶ所にあらず一切の聲聞辟支佛無漏智を以ても思惟して其の限數を知ること能はず我等阿惟越致地に住すれども是の事の中に於て亦達せざる所なり世尊是くの如き諸の世界は無量無邊なりと爾の時に佛大菩薩衆に告たまはく諸の善男子今當に分明に汝等に宣語すべし是の諸の世界若は微塵を著き及び著かざるものを盡く以て塵と爲して一塵を一劫とせん我れ成佛してより已來また此れに過ぎたること百千萬億那由佉阿僧祇劫なり是れより來た我れ常に此の娑婆世界に在りて說法教化す亦餘處の百千萬億那由佉阿

僧祇の國に於ても衆生を導利す諸の善男子是の中間に於て我れ燃燈佛等と説き又また其れ涅槃に入ると言ひき是くの如きは皆方便を以て分別せしなり云云

此の御言葉から觀察しても久遠實成の如來に在しますといふことが明々白々であるして見ると菩薩本行經の中に「我が此の身形は今日より後また更に受けず母の胎中に於て臥さるるは此は是れ我が最後の身に於て我れ當に作佛すべし」とあり又因果經の中に「我れ一切天人の中に於て最尊最勝なり無量むりやうの生死しじふに於て盡せり」と説かせられたなすは全く方便の權説ごんせつ、黃葉の止啼しぢ、錢と言はねばならぬ今日こんにちは陽曆四月の八日に於て各所に降誕會も修行せらるる様子であるに依り幸ひ永平道元禪師浴佛上堂の法語を拈起して釋迦牟尼佛大和尚の大慈悲心に報い奉りたいと思ふ

永年高祖浴佛上堂

今日我が本師釋迦牟尼如來毘藍園裡ニ降生ス年年今日アリ今日毎ニ毘藍園裡ニ在リ且夕道へ大聖降誕スヤ也夕否ヤ若シ降誕スト道ハバ一枚ノ修行ヲ許サ

ン、若シ降誕セズト道フモ一枚ノ修行ヲ許サン、既ニ能ク是クノ如クナラバ山ニ
礙ヘラレズ海ニ礙ヘラレズシテ王宮ニ誕生ス、既ニ山ニ礙ヘラレズ海ニ礙ヘラ
レズ生ニ礙ヘラル、ヤマタ否ヤ

先佛先祖縦ヒ生ニ礙ヘラレズト道フト雖モ今日山僧証ダ道フ生ニ礙ヘラレズ
ト、既ニ能ク山ニ礙ヘラレズ海ニ礙ヘラレズ生ニ礙ヘラレズ、盡界盡地ノ諸人ト
釋迦牟尼如來ト同生シテ言ク、天上天下唯我獨尊ト、乃チ是レ獅子吼ナリ、乃チ是
レ嬰兒ノ啼ナリ、恁麼ニ見成ス作麼生カ道ハン、良久ウシテ曰ク、盡界彌天嘉運至
ル、老婆心切聖降誕ス、聖降誕ス、什麼ヲ將チカ供養シ奉觀シ禮拜シ灌浴セン、清淨
ノ大海衆ヲ將チ佛殿ニ入リテ行儀有リ

天上天下唯我獨尊の獅子吼は、因果經、瑞應經等に顯はれをる、乃ち世尊生下したま
ふや十方面に七歩を行じ、而して一指は天を指し、一指は地を指して此言を獅子吼
せられ、且つ三界は皆苦なり何ぞ樂むべきものあらむと仰せられた

成る程天上天下は三界六道である、七歩を行じられたのは三界六道の外に進一歩
した境界が佛境界であるを、今や明かに佛眼を開いて十方面を見るに一人として

三界出離の者がない、何れも皆六道輪回の苦界に彷徨してをる者のみである、我は
此の苦界の衆生を教化せんが爲に降誕したのである、苦界の衆生をして悉く界外
無邊の佛國土に進一歩せしめんが爲めこの王宮に降生したのであるぞと示し
なされたのが周行七歩である、以上は教相學者に於ても常に談ずる處別に珍重な
こともないが、且く道へ禪者は如何にこの降誕を唱へたものであらうぞ、如何に世
尊の堂奥を進一歩したのであらうぞ

永祖の拈提したまひし如く、山に礙へられず、海に礙へられず、生に礙へられず、死
に礙へられず、迷に礙へられず、悟に礙へられず、三界に礙へられず、六道に礙へられ
ず、自に礙へられず、他に礙へられず、内に礙へられず、外に礙へられず、空に礙へられ
ず、色に礙へられず、有に礙へられず、無に礙へられず、一切時一切處一切法に礙へられ
られざれば、天上天下四方四維の中に於て唯我獨尊である、太尊貴露堂々である、萬
象之中獨露身である

正當恁麼の時、釋迦牟尼佛と同生同死同坐同臥である、釋迦牟尼佛は縦ひ天上天下
の大聖人なりと雖も、尙是れ萬億分身中の一佛に在しまして、其實は唯我獨尊の大

佛より化現したまふたので獅子吼は獅子吼なれど其實は嬰兒の啼聲である、嬰兒の啼聲を殺したまふたのは五濁の我等を救はんが爲めの大慈大悲である、故に天上天下唯我獨尊は決して嬰兒たる悉多太子の太平樂や御自慢ではない、五濁の末世に生れたる我等をして唯五濁とは煩惱濁衆生濁見濁命濁劫濁の五種なりとす我獨尊の大佛を知らしめ、且つ之に同化して自から其の大佛たらしめんとの大慈悲心であります、唯は一である、唯一の我體なれば之に肩を比ぶるものが無いのである、故にこれを法界の眞我といふ、この眞我は盡十方界に遍在して無欠無餘なるが故にこれを大我ともいふ、盡天盡地虚空界に周遍して無邊際なるが故にこれを大佛と名けたのである、是くの如き大佛にして等四すべきもの無きが故に獨尊と稱するのである、如何にこの獨尊佛と同化して盡界一佛觀に入ることが出来るであらうか、开は唯我が禪門に單傳せられたる三昧王三昧の大禪定である、永平高祖この三昧王三昧を拈起したまひてのたまはく

慕然トシテ盡界ヲ超越シテ佛祖ノ屋裏ニ太尊起生ナルハ結跏趺坐ナリ、外道魔黨ノ頂額ヲ蹈翻シテ佛祖ノ堂奥ニ箇中人ナルコトハ結跏趺坐ナリ、佛祖ノ極ノ極ヲ超越スルハタダコノ一法ナリ、コノユエニ佛祖コレヲイトナミテアラニ餘務アラズ云々

正當恁麼の時、迷悟凡聖の情量を超出して不可思議不可稱不可說の非思量底に安坐するのである、此時身心法界に圓融して無二無別となる、已に是れ結跏趺坐なりと仰せられたるからには、只文字語言の空理空想のみでは畢竟無益であるから、實地此觀に入らんとするものは宜しく坐禪すべきである、坐禪必ずしも僧堂裏選佛場に限らぬ、其志此にあらば盡地盡界坐時坐處が各自の大道場ではないか、故に大千沙界一蒲團といふ、大聖の降誕出世の本懷は衆生をして此の王三昧に入らしめんが爲めである、故に云ふ盡界彌天嘉運至る老婆心切聖の降誕と、珍重

第七 生死去來

滿天下の善男子善女人の諸君子卿等が佛教を見聞し、佛道を修行せむとするは畢竟何の爲めであるか、只この生死を明らむるが爲めのみである、然るにこの生死に處しながら、生の何たるを知らず、死の何たるを知らず、只夢の如くにして一生を渡り、幻の如くにして死し去るのが凡夫社會の習ひである、痛ましい哉、愚なる哉、夢幻

空華の世に處して自から夢幻空華なることを悟らす石火電光も留ならざる身命を持ちながら尙は徒に百年の齡を保たんとのみ思ひ、只終日終夜、目前の名利に耽け、五尺の臭骨頭に執着して、兎やせん角やせんとのみ醒寤するは洵に頼みなき事ではありませぬか、折角この受け難き満足の人身を受け、値ひ難き如來の正法に遇ひながら、生死の一大事を明め得ず夢の中に生れて幻の中に死するは寶の山に登りて空しく金玉を得ざるが如きものである、偶々教學に志すことあるも或は邪教異學に心を移して、如來甚深の妙法に入るものが少ない、已に如來の遺教に逢ふことを得たるも徒に言文字句にのみ拘泥して人生の一大事を領得し、佛説の眞實義を取取る人は眞に寂々寥々たるものである、先づ普通の佛教では出離生死と唱へ、此身は過去の業煩惱に依りて現はれた固まりの様に思ひ、此身が有るから三界に出没し六道に輪廻しなければならぬに依り、何ても再び三界の生死を受けぬ様にしなければならぬといふ風に教ふるのである、小乗教では苦果の依身と唱へ、何ても修行の力に依りて灰身滅智して我空眞如を證得し、不生不滅の涅槃に入り、羅漢の如く曠劫の壽命を保たねばならぬと考へ、又は煙の如く消て仕舞ふやうにも考

へ、緣覺乘の如く、十二因縁の流轉生死を斷じ、遠滅門に入りて涅槃無爲の域に入り辟支佛となつて此の苦世界に出でない様になるのぢやと考へて居る者もある、斯ういふ考へになると佛法は何うしても厭世教めきたものになる、若し人天教に依れば、天上界に生天するを目的とするかの如くに思はれ、淨土教に依れば、遠方の樂界に高飛をすることの様に思ひ、此の苦娑婆は何うしても厭ひ出て、不生不滅の境界になることの様に解してをる者もある、若し其れであつたならば、人情に反することになつて、他の世間教たる基督教なうと對抗することはできぬかも知れませぬ

サア夫れぢやから一休禪師の母堂が禪師の幼少にして千菊丸と稱せし時送られた書翰の端にも

返すく方便の説のみを守る人は糞虫と同じ事に候

ぞと申されたのである、夫れぢやから予が此の禪學を講じて佛祖の眞實義を開演せず居られぬ場合となつたのである、我が此の日本にて如來の眞實義を開演せられたのは、先づ永平祖師であらうと思ふ、師は釋尊より五十一代の祖師様である

から日本の釋迦牟尼佛と云はねばならぬ、されば先づ祖師の御言葉によりて生死
去來の道理を談じて見たいのである、正法眼藏諸惡莫作の卷に

生ヲ明ラメ死ヲ明ラムルハ佛家一大事ノ因縁ナリ

と示しなされた、只明らむると仰せられたので、生死を厭へとか離れよとか仰せ
られたことはない、只明らめたらば夫れてよいのである、生死の道理に味いからし
て、生死の爲めに縛せらるゝのであるけれど、生死の何物たる其の眞實體を捕まへ
て見れば生や全機現、死や全機現である、圓悟禪師の語に
生也全機現死也全機現、遍塞大虚空、赤心常ニ片々タリ
是れ等は餘ほど面白い説示である、

正法眼藏辨道話に

生死ハ除クベキ法ゾトオモヘルハ佛法ヲイトフ罪トナル

夫れ此處ぢや、除くべき法ぞと思ふは、聲聞の酒に酔ひ、緣覺のアルコールに浸され
たからの事である、若し生死を厭ひ、生死を除いたならば、菩薩の六度萬行、三大阿僧
祇の修行は何を以てしたものであらうか、又諸佛は何うして衆生教化がてきるて

あらうか、此の生死があればこそ諸佛世尊の活動がてきるのである、只同じ生死な
れど、凡夫の生死と賢聖の生死と二様がある、故に正法眼藏身心學道の卷に

身學道トイフハ身ニテ學道スルナリ亦肉團ノ學道ナリ身ハ學道ヨリキタリ學

道ヨリキタレルハトモニ身ナリ、盡十方界是レ箇ノ眞實人體ナリ、生死去來眞實

人體ナリ、コノ身體ヲメグラシテ十惡ヲハナレ、八戒ヲタモチ三寶ニ歸依シテ捨

家出家スル眞實ノ學道ナリ、コノユエニ眞實人體トイフ

生死去來眞實人體トイフハ、イハユル生死ハ凡夫ガ流轉ナリトイヘドモ大聖ノ

所脱ナリ云々

一念迷へば凡夫の流轉となり、一念悟れば大聖の所脱となる

身心脱落とは流轉生死の身心を脱落したので、除いたのではない、脱落の身心は赤

心片々、大虚空に遍塞して全機現前である、故に又正法眼藏生死の卷には

生死ノナカニ佛アレバ生死ナシ佛とはドンな佛であらうぞ、佛は覺なりといふ

てはないか、覺は即ち明である、この覺明を以て生死を照せば、生即不生、死即不死と

なる故に佛はこの生死の中にあるので、生死の外に佛を求めんとするは、木に縁て

魚を求むる様なものである、又次に

タダ生死スナハチ涅槃トココロエテ生死トシテイトウベキモナク涅槃トシテ
ネガフベキモナシ、コノトキハジメテ生死ヲハナル、分アリ——乃至——
コノ生死ハスナハチ佛ノ御イノチナリ、コレヲイトヒスラントスレバ、スナハチ
佛ノ御イノチヲウシナハントスルナリ、コレニトドマリテ生死ニ着スレバコレ
佛ノ御イノチヲウシナフナリ

此に佛と仰せられたのは御の宇があるから、先づ果上の諸佛として見なくてはな
らぬ、併し還た自性天眞の如來と見るもよろしい、釋迦牟尼佛の御身も四大五陰、衆
生の身も四大五陰ぢや、一念悟れば涅槃となり、一念迷へば生死となる、故に生死即
涅槃とも涅槃即生死ともいふ
之を要するに悟人は生死を透脱して生死に處するのである、透脱せざれば苦果の
依身透脱すれば眞實人跡である、眞實人跡であるから、衆生濟度も成し得らるゝの
である

永平廣錄第一卷に上堂の法語がある

○舉ス國悟禪師道ク、生死去來眞實ノ人跡ト、南泉道ク、生死去來是レ眞實跡ト、趙
州道ク、生死去來是レ眞實ノ人ト、長沙道ク、生死去來是レ諸佛ノ眞實跡ト、師云ク
四員ノ尊宿各々家風ヲ展ブ、俱ニ鼻孔ヲ端ス、道フコトハ也、夕道ヒ得タリ、只是レ
未在若シ是レ眞實此時宇治の眞聖寺に居給ふナラバ、又且ツ然ラズ
生死去來ハ只是レ生死去來ナリ

若し向上に拈提すれば、眞實跡といふも己に語弊がある、全機現といふも雪上に霜
を加へたやうなもの、生は生に任せ、死は死に任せ、之が即ち生に礙へられず、死に礙
へられざる底の活眼睛である

來て見ても又來て見てもおなじこと

こゝらでちよいと死て見やうか

之が即ち生死岸頭に大自在を得、六道四生に遊戯三昧する底の人と云はねばなら
ぬ、諸君よ、此の生死を生死に任すことが出來ますか、生は生の儘に、老は老の儘に、病
は病の儘に、死は死の儘に、儘といふ時は、毫末も念頭に懸けぬ事ぢや、懸けぬといへ
ば懸けまいといふ一ツの念慮が起つて來るかも知れぬ、故に懸念すまいといふ、觀

念も亦放下しなればならぬ、放下するといへば又其處に念が起るかも知れぬ、若し發つたならば起るに任せて相手にならぬが宜い、相手になるから火を消すに油を注ぐやうな事になつて終に止む時はない、只々相手にさへ成らなければ自然立消となつて仕舞ふものである、何故かといふに物は必ず對待より起る、善惡眞妄の念慮は必ず色心二法の對待より起る、その對待を絶する時は色心不二、心境一如となるに依り、始めて不生、不滅の大涅槃界に安住することが出来る、諸君試みに意根を坐斷して見られよ、意根を坐斷するには禪定に入らねばならぬ、深く禪定に入て十方の佛を見たてまつる、己に十方なれば上下と四方四維とである、さて此時謂ゆる十方佛とは如何なるものと進一歩して見られよ、一佛か二佛か乃至百千萬億無量無邊の諸佛か、有相好か無相好かと、觀無觀、想無想に入るときは、無邊の虚空覺に顯發せらるゝの歡喜地に入りて無量無邊の快樂を得らるゝ、時節がある正恁麼の時、我れ此利を見るが故に此事を説く、我れ此の三昧に入るが故に人をして此の歡喜地、藏世界に導くなり、と獅々吼する、とが出来てあらう、是くの如く心地不動の大禪定に住するや、生來らば只是れ生死來らば只是れ死、老病來らば只是れ老病

と、虚心平氣、任運にして時を過すことが出来る、短命なるも長命なるも、壯健なるも怯弱なるも、乃至貧賤なるも富貴なるも、此等は皆善惡因果の業、因果報である、と明らむるときは、其業に任せて足ることを知る、また最勝の善身、難受の人身であるから、徒に過さぬやうに、人道を全うして天道に任せ、深く佛道を行じて、世間に墮穢せられず、世に處すること蓮華の水に著せざるが如くならば、其れこそ生死去來眞實の人跡である

第八 寒熱不到の話

洞山因僧問、寒暑到來如何、廻避師云、何、不向、無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、師云、寒時、寒殺、開梨、熱時、熱殺、開梨。

指月禪師の拈評

師云、洞山直言、無寒暑、應不著、毫釐、人徒尋此處所、寒殺熱殺、時是、蓋天蓋地、汝不、了計度久、或頌、或判、未免、藤倚樹、今亦續、人語、垂手掀翻、萬仞豈、正偏非、我爾、安排、瑠璃古殿人厨、去忍俊、韓獝、競上階。

●洞山因僧問、これをドウザンと讀む人があるけれど、禪門では常にトウザンと

説てをる即ち洞山といへる山號の寺院に住持となつて居られた良价禪師とて世にも有名な善知識にて無論支那の方で達磨大師より十一代目に當る正傳の祖師様でありませぬ、何れの祖師とてもあるかは無けれどこの洞祖は取分けて吾が祖門に一大偉業を傳へられたのであるその偉業とは何であるかといふに五位の法門を建立し易の墨變に合して妙に能く宗乘の極秘を發揚せられた其の弟子に曹山本寂といへる人があつて師と共に其旨を顯揚せられた時の人が呼ばれて曹洞宗と名けたといふ日本の道元禪師もこの宗統を繼承し來つて西來直指の大道を弘められたのである此人に向つて或僧か一間を設けたのである

●寒暑到來如何廻避 全体祖門の流義として宗乘を拈提するに教相又は佛法臭き詞を以てすることを思ひ嫌ひ他事を借て商量するを常とするのである例へば詩を作るに梅を梅と云はずに氷魂といひ松を松と云はずに蒼龍といふ竹を竹と云はずに貞心といふが如く他の異名を以て宗乘を問話するので今茲に寒暑といふのたからとて其實文字の如く暑い寒いの事ではない

洞山大師は曾て正偏五位といふを立てられたそれをば正偏と云はずして正偏の

事を問うて來たのであると申しても正偏五位の語に聞いたことの無い人には言葉からして分らぬのであるから困つたものぢや

●正偏五位の談

元來それ理の空なるを正位と定め事の有なるを偏位と定めたるものぢや又正位を君とし偏位を臣としたもの、又本體を正位とし妙用を偏位とすることもある曹山の旨訣に

正位ハ即チ空界本來物無シ
偏位ハ即チ色界萬象ノ形有リ

と申してある併し空界といふも色界といふも一心の體用に過ぎませぬ、一心の本體は空寂なるものなるがゆゑそれを知らしめんが爲め、●點を以て之を示し、一心の妙用は無礙自在なるものなるがゆゑそれを知らしめんが爲め、○白點を以て之を示すので、○の空界より色界を望む時を正中偏として○かういふ形を示し、色界より空界に向ふ時を偏中正として○かういふ形を示します、ソコで正位の獨立を示す時には○かういふ形を示し、偏位の獨立を示す時には○かういふ形を示し、以

上四位の兼帯を示す時には●點を示します併しこれは黑白交互の圖を示すのが適當であります更に改めて示せば

- 正中偏……………君視臣……………向
 - 偏中正……………臣向君……………奉
 - 正中來……………君視君……………功
 - 偏中至……………臣視臣……………共功
 - 兼中到……………君臣道合……………功々
- 曹山大師の旨訣により更に申せば

- 正○中○偏……………背理就事……………三
- 偏○中○正……………捨事入理……………三
- 正○中○來……………實際理致……………三
- 偏○中○至……………佛事門中……………三
- 兼○中○到……………理事圓融……………三

一應斯様に列ねては見ましたけれど従前素養のない諸士には尙ほ得心が行かぬ

かも知らねど是れ以上の辨解はマアお預りにして置く

僧の問意は正位の時には偏位の色界に廻避し偏位の時には正位の空界に廻避すること出来ませんが若しその正偏色空事理が一時に到來した時には何れの處に廻避しどの様に行履したものでありませうか畢竟安心決定の處を指示して頂きたいものでありますと洞山に喰て掛つたのである

● 師云何不向無寒暑處去 其方は寒暑の對待に涉つて居るから兩端に迷ふのである故に寒熱不到の場處に去つたら宜いではないかさて如何なる處が寒熱も正偏も及ばぬ處であらうか其處が衲僧行李の場處である

● 僧云如何是無寒處 此僧問端はエラウ氣が利いて居たやうであつたがこの一言で化の皮が顯はれて了ふた

● 師云寒時寒殺開梨熱時熱殺開梨 開梨とは今ていふと和尚よりも少し位階の低い長老といふ位なところ故に此處では汝といふほどの意味に見て置けば宜いのである汝其方は此方が無寒暑の處といへば直にその言葉に着き來つて其んな處が何れにかあるやと思つて居る様子であるが爾うてはないや利休の歌に

寒熱の地獄にかよふ茶び杓も

心無ければくるしみもなし

寒があるから熱がある、熱があるから寒があると思ふのであるけれど、若し寒の時は寒の一法になり切て寒の爲に寒殺せられ、熱の時は熱の一法になり切て熱の爲に熱殺せられて了へば、管に寒を知らざるのみならず、熱をも亦知らぬ筈である例へば、かの氷中に住める蟲は氷の冷さを知らず、火中に住める蟲は火の熱さを知らぬ様なものである

馬祖道一禪師の御詞に

法界ヲ建立スレバ盡ク是レ法界若シ真如ヲ立スレバ盡ク是レ真如若シ理ヲ立スレバ盡ク是レ理若シ事ヲ立スレバ一切法盡ク是レ事ナリ

と今も亦その通り正位の時には正位の一法究盡にて、無盡法界が悉く本來無物にして其の無物といふ心もない、それが即ち寒殺である

又偏位の時には偏位の一法究盡にて無盡法界が悉く色界萬象にして事々無礙法界である、已に事々無礙なるが故に事の爲に礙へられぬ、礙へられなければ一切時

一切處が無礙碍であるから無礙碍であるといふ心もない、それが即ち熱殺である、之を智不到の處ともいへば、又非思量の境界ともいふ、何となれば能所泯滅して對待を絶するからの事である

この絶對無限の中位が即ち衲僧の本家郷にして禪者の大道場である

▲師云。指月洞山直言無寒暑。燠不著。毫釐。

洞山の一言は實に金剛王の寶劍にて寒に逢ては寒を殺し、熱に逢ては熱を殺し、事理正偏迷悟有無の見、一刀兩斷に斬り盡して了まはれたので、其處に毫末蓋毛の佛見法見だも残らぬのである

▲人徒尋此處所。然るを知らずして、否聞取る耳が無いものぢやに依て、別に無寒暑の處があるのかと道理なき所に道理の會を爲し、分別なき所に分別を生ずる徒者がある

▲寒殺熱殺時は蓋天蓋地。洞山の謂ゆる寒殺熱殺の正當時は天を蓋覆し地を蓋覆して無陰陽地と爲し、遙に天外地外に逍遙することを開示せられたのである
▲汝不了計度久。汝等諸人は洞山の開示を了解せずして、無寒暑の處は何處て

あらうぞと久しく計較卜度の分別を弄して居るのである

▲或。頌。或。判。亦。未。免。藤。倚。樹。憐。れ。ま。し。い。事。に。は。古。來。覺。範。慧。洪。ち。や。の。浮。山。の。遠。録。公。ち。や。の。黃。龍。の。死。心。和。尙。ち。や。の。い。ふ。歷。々。が。頌。を。作。つ。た。り。又。は。之。を。判。断。し。た。り。した。こ。と。も。あ。る。け。れ。ど。其。實。は。亦。未。だ。藤。の。樹。に。纏。み。附。い。た。や。う。な。も。の。で。二。物。對。待。の。見。を。免。か。れ。ぬ。の。て。あ。る。

▲今。亦。續。人。語。此。れ。は。指。月。禪。師。が。古。人。の。韻。を。和。す。る。と。の。こ。と。其。は。明。覺。の。頌。古。四。十。三。に。

垂手還同萬仞崖

正偏何必在安排

琉璃古殿照明月

忍俊韓獹競上階

斯ういふ頌がある、その和韻をして自己の意見を吐露するとのこと

▲垂。手。猶。翻。萬。仞。崖。先。づ。洞。山。大。師。の。真。意。は。恰。も。手。を。垂。れ。て。千。尋。萬。丈。も。あ。ら。う。と。い。ふ。懸。崖。よ。り。掀。翻。と。ヒ。ツ。ク。リ。返。つ。て。目。も。届。か。ぬ。程。の。谷。底。へ。放。身。捨。命。す。る。や。う。な。も。の。で。大。死。一。番。向。上。非。佛。の。處。に。あ。る。

▲正。偏。非。我。爾。安。排。然。る。に。洞。山。大。師。が。正。偏。五。位。を。安。排。布。置。し。て。諸。人。に。示。さ。れ

たのは憐兒忘醜の權謀術策に過ぎぬのである、其の正偏も實は洞山の本意でない然るを正偏といへば直に學人が其の正偏に取り附いて徒らに安排布置の名相をだに弄ぶやうになつたのは困つたものぢや

▲瑠。璃。古。殿。人。扇。去。之。を。更。に。譬。へ。て。見。や。う。な。れ。ば。洞。山。大。師。が。正。偏。五。位。や。功。勳。五。位。を。排。列。せ。ら。れ。た。の。は。瑠。璃。や。金。銀。を。以。て。鍍。め。た。古。色。儼。然。た。る。宮。殿。の。立。派。な。所。へ。人。が。糞。を。た。れ。て。遺。し。去。た。様。な。も。の。で。實。を。以。て。之。を。い。へ。ば。清。淨。潔。白。な。る。宮。王。殿。上。を。汚。し。た。も。の。と。云。ふ。べ。き。で。あ。る。

▲忍。俊。韓。獹。競。上。階。忍。俊。不。禁。と。て。此。れ。は。コ。ラ。へ。ら。れ。ぬ。こ。と。韓。獹。は。俊。犬。ち。や。と。い。ふ。説。も。あ。れ。ど。韓。狗。塊。を。逐。ふ。と。も。あ。つ。て。此。れ。は。馬。鹿。犬。の。事。ぢ。や。ら。う。と。思。ふ。食。に。餓。た。る。馬。鹿。犬。奴。ど。も。が。堪。ら。な。い。も。の。で。あ。る。か。ら。そ。の。古。殿。に。ヒ。リ。去。た。人。糞。を。ば。一。疋。や。二。疋。で。は。な。い。多。く。の。韓。獹。が。寄。り。た。か。り。そ。れ。を。食。べ。や。う。と。て。我。も。一。と。競。う。て。階。段。に。上。る。と。も。云。つ。て。見。や。う。か。洞。山。大。師。が。一。た。び。此。の。五。位。を。排。列。せ。ら。れ。て。か。ら。古。に。今。に。ワ。ン。と。吹。へ。立。て。る。あ。り。さ。ま。は。聞。く。に。堪。へ。ら。れ。ず。見。る。に。忍。び。ら。れ。ぬ。様。な。心。地。が。す。る。と。は。指。月。禪。師。の。卓。見。で。あ。る。今。時。て。は。韓。狗。や。滿。洲。の。犬。は。人。糞。

を競ひ貪ぼる事が甚しいといふ、何うぞ韓獺の境界を超脱して洞山の宗乗に参じたいものぢや

第九 臘八成道普説

今日は陰曆で明治三十九年丙午十二月の三日に當るので、天下各所の僧堂にては臘八接心を爲しをる所もあらう、縦ひ接心の坐禪を爲すの機會に逢はずとも佛弟子たるものは在家出家の別なく、顯密聖淨の宗派を論ぜず等しく大師釋尊の艱難苦辛を追想して、御恩報謝の道念に住しなくてはならぬ、然るに臘八接心などは禪宗道俗のなす事柄にて、我等の如き教密淨土の流れを汲む者には關係の無き事なりと澄まし込んでをる佛教徒も多くあるであらうけれど、开は大なる心得違ひといふものぢや、何となれば如何に教密の宗なればとて、其の本源を原ねれば、悉く臘八成道の端的より建立せられざるはない、成道以前に説かれた經文とては一部もせざるものはない、阿彌陀も觀音も地藏も大日、將た三世十方の諸佛如来も悉く釋尊成道の眼睛裏より化現せざるはない、然るを夫れ成道忌を營むは獨り禪宗諸派

のみに限れるといふに至りては、實に佛教各宗の爲めに悲まざるを得ない、扱て然らば禪宗諸派の流れを汲む道俗は、残らずこの成道忌を營むてあらうか、昔

く臘八接心を爲すてあらうか、此れは甚だ疑問である、イヤ一生懸命に一日より一週間、道場に閉ぢ籠つて不出戸の接心を爲しつゝある道俗も少なからぬてあらう、此等道俗の諸禪者に對しては、滿腹の誠意を傾けて隨喜の同情に堪へない、然るに夫れ禪宗の流れを汲み、自から正傳の宗旨である、直指の大道である、釋迦の正宗である、予と自負してをる、僧徒其れ自身が一向に坐禪といふことを爲さず、坐禪の何物たるを知らず、只終日終夜鸚鵡の如く口頭三昧、文字三昧、れ負けに普通學三昧にのみ空しく光陰を送り、一生の人身を過さしめつゝあるのが十に八九を占め、其の宗外若くは世上より、日日夜夜に非難攻撃を受けつゝあれど恬として其の痛痒を感ぜざるに至りては、悲涙千萬端と云はなければならぬ、是くの如きは末世末代の澆風にて、其の宗徒一般の罪過なりとはいへ、其の宗權を握り、宗法を左右する者の自暴自棄なりと責めざるを得ない、さて又堂々たる碩徳なり、宗師なり、禪師なりと呼ばれつゝある人々が、自から自己の宗旨を忘れて自からも發起して坐禪せず、人

を勤めても坐禪せしめず、年積り日累なるも波々として光陰を徒消するに至りては實に血淚湛々として其の停まるを知らない、嗚呼禪宗の命脈は已に斷絶したりと云はねばならぬ、嗚呼禪僧も亦文字法師の流類たるべきか、坐禪せずして禪機を語る、是くの如きは哲學者も能く語り、外教者も能く論ふ、何の貴きことかある、嗚呼釋尊に對して何の面目があらうぞ、歷代祖師に對して何の申譯があらうぞ、他は鬼もあれ、角もあれ、苟くも佛法の正門に入り、佛陀の堂奥に到り、この身心を決擇し、安心決定の田地に到らんとする者は、直に佛法の根元を探らなくてはならぬ、その根元は何處にあるのであらうか、永平祖師云く、佛道は人人の脚跟下なりと、然り佛法は哲學理學の如く、茫々たる宇宙の穿鑿や、物質の議論をするのではなく、全く自己の心地を開明するのである、釋尊の臘八成道は全く自己の心地を開發したまふたのである

於戲この心地を開發したまふが爲めには幾多の辛酸を嘗めさせられ、幾多の艱苦を忍びたまふたのであらうや、和光同塵は結縁の始め、八相成道は利物の終り、卓上して申さは三大阿僧祇劫の菩薩行ぢや、娑婆往來八千返とは釋尊の自から仰せら

れた言葉である、久遠實成の淨法身として見るは鬼もあれ、十九出家の當時より、仙人に事へて有らゆる艱難に堪へ、六年端坐の修行によりて、今より二千九百餘年の昔し、臘月八日の曉明星の出づる時、畢鉢羅樹下の金剛座上に忽然として無上乘道を入悟したまふた、之を成道とも、成正覺ともいふ、大智禪師はこの佛成道を頌して

歴劫操持 成法身 體如明鏡 淨無塵

とも又

果滿三祇道始成 放光動地度群生

とも申されました、その道とは心地の事である、法身といふも心性の事である、佛道を行ずるものは佛陀の如くに正身端坐の行持を行取しなければならぬ、佛陀の成道と、凡夫の成道とは、螢火と太陽との如くなれども、一旦悟道明心の端的を得なければ佛祖に相見する事はならぬ、さて佛陀は正覺成就の曉、何と師子吼せられたのであらうか、そは

我と大地有情と同時に成道す

と仰せられた百千の三昧無量の妙義は、忽然成道の直下より流出したのである、あ

満天沙界の諸禪者よ、この忽然成道の端的は如何なるものであらう乎、この忽然は無造作の忽然でない、三祇百大劫の年月満ちての忽然である、却々何うして一週間や半週間の臘八坐禪で以て、忽然成道、忽然見性、忽然見道、忽然大悟の境域に入るものにはあるまいぞ、無しとは云はぬ、有りはすれども、螢火と太陽との差があるが、螢りに螢火を以て、太陽に擬するが如きの天狗になるまいぞ、縦ひ天地撲落し、虚空震裂するの時節が有りとするも、誤つて見性悟道なりと思ふまいぞ、此は是れ意識の轉變業識の變弄なるぞ、認つて歡喜の思ひを爲すまいぞ、此は是れ暫時の岐路なるぞ、譬地の智通なるぞ、妄りに衝天の志氣を擧げまいぞ、縦ひ入頭の邊量に逍遙するとも、出身の活路を缺くものなるぞ、些の小信心に誇りて佛祖と二面裂破すと思ふまいぞ、思へば直に天魔の眷屬なるが世に往々見性したり悟道したりといふものを見るに、食欲も舊時の如く、瞋恚も舊時の如く、邪見も舊時に異ならず、妻帯もする、食肉もする、飲酒も勝手次第、美服も食ばる、名譽も食ばる、何等凡夫と異ならぬ、其んな見性悟道ならば、半文錢の價値もないぞ、却て世を害し、佛法を破るの天魔外道である、面山禪師云く、飲酒の釋迦ありや、食肉の達磨ありやと

誠に慎むべきは見性の響きである、悟道の聲である、只言説のみありて實義なしてある

左は去りながら、一分の見處を以て、世尊成道の端的を窺はれまいものでもあるまいに依り、且く注脚を下して見やうか

我と大地有情と同時成道すと、此語を聞くもの疑つて思ふに、釋迦牟尼佛が成道せられた時には、大地の有情も共に成道すとあれど、我等は何故未だ救はれないのであらうぞ、大地の有情は依然として未成道である、未成道なるが故に、四十九年の説法もあつたのであらう、歴代祖師の出世も未成道の有情を濟度せんが爲めである、然るに何故同時に成道したと仰せられたのであらうかと、又或る者は云く、已に救はれてをるのぢやけれど、自から己を味ましてをるから未成道であるぞと申し居る者もあるが、其んな事では、逆もこの公案は捌けまいよ

總持開山圓明國師の垂語を聞かれよ
 イハユル我トイフハ釋迦牟尼佛ニアラズ、釋迦牟尼佛モ、コノ我ヨリ出生シキタル、タビ釋迦牟尼佛出生スルノミニアラズ、大地有情モミナコレヨリ出生ス、大綱

フアグルトキ衆目悉クアガルゴトク釋迦牟尼佛成道スルトキ、大地有情モ成道ス、タゞ大地有情成道スルノミニアラズ、三世諸佛モミナ成道ス

と拈提せられた、この我といふは自覺の境界にして絶對無限の眞我である、與大地有情は覺他の當體にして諸法實相である、この我と與とは二にして不二である、不二なるが故に覺行圓滿である、覺行圓滿なるが故に正覺とも大覺とも妙覺ともいふ予が垂に世に公にしたる正信無常觀に淨穢不二の大圓覺界といひ眞如の都といひしは、正しく此の佛境界を形容したのである

三祖鑑智大師の信心銘に「眞如法界他無く自無し、急に相應せむと要せば但だ不二と謂へ、不二なれば皆同じ、包容せずといふこと無し」とある、この不二包容の大圓覺が佛陀の開かせたまひし眞知見である、淨名經に不二門といひ法華經に佛知見といひ又は無量義處三昧といひ華嚴經に毘盧遮那藏三昧といひ般若經に王三昧といひ圓覺經に神通大光明藏とあるも皆この成道の端的より開示せられたものである

我は自にして與は他である、自は自性にして法界圓融である、他は諸法にして圓融

法界である、この自他は本來一枚であるから深く自覺に入るときは自の外に他の見るべきなく、深く他覺に入るときは、他の外に自の見るべきがないから、一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛と説く成佛とは成覺である、自覺の境界に入るとき盡十方界が悉く自己の光明裏となる、世尊成道の曉には大地有情が悉く世尊の眼睛裏となつたから全く同時成道、同時成佛、同時成覺となり來つたのである、故に圓明國師も更に此旨を拈提して

仔細ニ點檢シ仔細ニ商量シテ我ヲアキラメ與ヲシルベシ、タトヒ我ヲアキラメタリトイフトモ、與ヲアキラメズンバマタ一隻眼ヲ失ス然リトイヘドモ我ト與ト一般ニアラズ、兩般ニアラズ、正ニ汝等ノ皮肉骨髓コトゴトク與ナリ、屋裏ノ主人公コレ我ナリ云々

と仰せられてある、又大地有情の會を爲すべからずとも仰せられてある、天童永平は拈じて身心脱落、脱落身心と直指せられた、身心脱落は世尊の自覺である、脱落身心は世尊の覺他である、大地有情とあればとて客觀の天地世界有機動物の事なりと思はぬがよい、又我とありたればとて釋迦其人なりと思はぬがよい、忽然として

知見開發するときは、縦ひ五尺の暖皮肉といへども萬象之中獨露身である、忽然として人法二空を了ずるときは、三尺の童子も亦是れ無邊の法王身である、何ぞ夫れ世尊に譲るべきぞ、人々鼻孔遼天、竝立萬仞なるを恁歴の田地に到りてこそ、釋迦何人ぞ我亦何人ぞといふことも出来るであらう、如何にして恁歴の田地に到り得ることができるであらうか、その捷徑は只此の正身端坐である、思量箇の非思量である、各自脚下を照願して如何んと思ふ、佛法は元來遙かなるにあらざ、妄りに宇宙天外に向つて尋思することを休め、親しく自己の心地上に向つて求むるあらば始めて久遠質成の釋尊に對面ができるであらうよ

第十 直指單傳

永平祖師正傳の宗旨はドンなものであらうか、諸人知らんと要すや、之を知るには永祖の垂示を見聞しなければならぬ、垂示は甚だ多くして些々たる断片のみにて其の堂奥を伺ふことは素より不可能のことなれど茲に少しく拈出して未知の人々にお知らせ申さう

全躰本然誰カ處所ニ返ラン

通身親切豈蹤由ヲ尋ネンヤ

此れは都て漢文の法語なれど今は讀み易きやうに伸書にして御覽に入れるのであるから其の積りて諸君子も豫て知悉せらるゝ如く、普勸坐禪儀の冒頭には「道本圓通」と御拈提になつてある、今此に全躰本然と拈出せられたのも矢張同じことで、人々具足箇々圓成せる大道の全躰である、或は拈じて萬象之中獨露身といひ、或は拈じて二空法王身といひ、或は拈じて唯我獨尊といひ、或は拈じて本來の面目とも、主人公とも、自性天真佛ともいふ、本然とは本より然りて、不垢不淨不増不減少しも缺目なき十五夜の満月を見た様なもので、この眞如の明月は従本以來チヤンと第一義天に皎々と照り輝いてをるのである、誰か處所に返らん、誰も彼も一切衆生、色聲香味觸法の六塵、財色食名睡の我所などに執着し、逗留と迷ふ筈はない、何故かといふに、その六塵も我所も都て我が全躰大用ぢやもの、直下第二人無し山河大地も引くるめて此の法王身ぢやもの、通身親切豈蹤由を尋ねんや、全躰といひ通身とあればとて、此の五尺の赤肉團といふ譯ではない、盡十方世界眞實人躰と拈ずるこの通身である、己に眞實

人跡ならば五尺の身軀に一微塵も餘物の疎んずべきなきが如く、この大地山河も吾人の本軀にして親念切々少しも取捨すべきはない、又此處は穢土である彼處は淨土であるからとて或は之を厭離し、彼を欣求するといふが如き蹤跡由來を尋ね廻るには及ばぬことであるとの祖意と伺はれる、此句は同案常察禪師の十玄談は玄機の句に

迢々空劫莫能収、豈爲塵機一作繫留、
妙體本來無處所、通身何更有蹤由、

とある、その意味を敷衍せられたのであるから、この御垂示は佛祖單傳の玄機と心得べきである、次に

既ニ一句ヲ超ユ焉、三乗ヲ勞セン、手ヲ撒スレバ、便チ當リ身ヲ翻スレバ、即チ露ル

此句も亦前の句意を轉用せられたのである、并は何うかといふに

靈然一句超群象、迥出三乘不假修、
撒手那邊千聖外、回程堪作火中牛、

斯うである、此句より來つた御垂示であるから、既に一句を超ゆとか、三乗を勞せんとか、手を撒するとか、仰せられたのである、一句とあればとて文句の事ではない、全體通身の靈々然照々乎たる所の圓頓一乘一句語であらうか、若し既に一乗ぢやの圓頓ぢやのといへば、また言句に墮ちるから一句を超ゆと仰せられた、三乗とは聲聞緣覺菩薩のこと、此の三乗は勿論一乘も迥かに飛越て教相家に談ずる一佛乘にも止まらぬのが祖門向上の極談である

手ヲ撒スレバとは撒、那邊千聖外とある其の意味で撒は放撒とて手裡に握つてをるものを撒き散らかして了ふこと、三乗ぢやの一乗ぢやのと名相言句の階級を握り執著して居たのでは佛祖向上の玄機妙體に諦當ならぬゆゑ、それをカツキリと手打ち拂つて見れば始めて那邊と相應することが出来る、○身ヲ翻スレバとは「回程堪作火中牛」とあるを轉用せられたので、前句は向上底、今句は向下底、登るときには絶頂まで登り切らんと回途復妙の全身を露現することが出来ぬ、之を要するに撒手と翻身、一が缺けても全體本然の端的に當ることが出来ぬ、撒手は諸法皆空の般若である、翻身は諸法實相の法華である、撒手は本來無物の正位にして、翻身

は色界萬象の偏位である全體是れ正位にして通身是れ偏位である、その正位にも坐著せず、その偏位にも依倚せざるを正中妙挾ともいふ、曹山大師が冥に衆縁に應じて諸有に墮せず、染に非ず、淨に非ず、正に非ず、偏に非ず、故に虛玄の大道無著の眞宗と曰ふと唱へられたのも、恁麼の消息である

之が使ら八萬法藏の本源にて一代時教の卷軸である
實ニ是レ靈山破顔以後四七未ダ一絲毫ヲモ添フルコト
ヲ得ズ少林徹髓以來二三何ゾ一絲毫ヲモ減ズルニ堪フル者ナラン哉

昔し釋迦牟尼佛が西天竺に在せし時、靈鷲山上說法の會座に八萬大衆に圍繞せられし折柄、一枝の青蓮華を佛陀に供養した者があつた、佛直にそれを拈擧して大衆に示された、平素は横説縦説あるに、其日に限り只拈擧のみにて何とも仰せられな

し、一切の衆會は默然息を殺して世尊の尊顔を伺うて居たのである

時に一の弟子たる大迦葉尊者のみが佛陀の眞意を傾じて莞爾と笑はれた、時に世尊口を開かせられ

我に正法眼藏涅槃妙心あり摩訶迦葉に附屬す將來に傳持して斷絶せしむること莫れ

と宣言せられた一語の下に迦葉尊者が傳燈の第一祖とならせられた、それを靈山破顔と一句に拈擧せられたのである、之が直指單傳の根據となつたので、其の傳へられたものは全く涅槃妙心である

以後四七とあるは其れより西天二十八代達磨大師に至るまでの祖師方を指されたのである、その師資相傳の綿々密々なることは、一器の水を一器に滴ぐが如く一絲毫だも添へることはならぬのである、又

少林徹髓以來とは、二十八代の達磨大師が二十七祖般若多羅尊者の付屬に依り、支那國の衆生に佛心印を傳へんが爲め渡來せられ、初め梁の武帝に相見して法談に及ばれたけれど、機縁が契はぬので、辭して魏の嵩山少林寺に寓止し、竊かに求法の門弟子を待ちつゝ、あらせられた、威應道交ともいふべきであらうか、丁度その頃、神光といへる大丈夫の士が求法の丹誠を凝して居らるゝ折柄、神人の告げに依り、臘月九日の夜、達磨大師を少林寺に尋ね、求法の誠を投せんが爲め、左臂を切斷して赤

心のある所を呈露せられた是れを詢に得難き求法の神器であると看取せられ多
 年參禪學道の結果五人の弟子を得られたけれどこの神光といへる人が大師の骨
 髓に徹しられ汝は我が髓を得たりと證明印可せられ且つ如來の正法眼藏涅槃妙
 心を傳へられたソコで西天二十八代の達磨大師は支那開教の始祖であるから後
 世これを震旦初祖と仰ぎ神光の改名せられし慧可を二祖とし又は之を太祖と稱
 することになつたので三祖僧璨四祖道信五祖弘忍六祖慧能と單傳したので少林
 徹髓以來二三と仰せられたのである
 二三何ぞ一絲毫をも減するに堪ふる者ならん哉少しても減ずるとは出来ない何
 故なれば元來不増不減の妙心であるからのこと然らば六祖までかといふに爾
 てはない
 六祖に青原南岳の兩神足として惠來お弟子が二人出來たので大法を兩人に付屬せ
 られたところが一萬千里の勢ひを以て續々とこの大法を慕ふ者が出來概略五派
 に分れて滔々四百餘洲に傳播せられたのである
 言宣ニ涉ラズ唯ダ證契ス念想ニ滯ルコト無シ是レ直指

ナリ

大法の受授は書籍や密書の言宣に涉り眞傳口訣の言端語端に與かるものではない
 い唯だ貴む所は證契即通にある如何に言宣が立派で文字が巧みであればとて得
 道證契の人ならては傳法せられないのである又心慮念慮を遣うして講釋が上手
 であるからとてそれを翻法の人は許さない彼れ三藏法師文字法師の言詮を專
 らとし念想を巧みにするが如き輩と同日の論てはない全く得道したか證契した
 かといふことを見届けてからでなければ印可證明しないといふのが祖門の生命
 であるこの生命は師資面授の上に顯はるゝので文字章句の上に於て指示するこ
 とは出來ぬから眼より眼に傳へ耳より耳に傳へ口より口に傳へ心より心に傳ふ
 るので唯佛與佛乃能究盡餘人の窺ふべからざる所に單傳の秘訣がある故に之を
 直指と稱するのである直指の直指たる單傳の單傳たる妙旨は全く此に存するの
 である

是ヲ以テ室峯九年ノ面壁聲名遠ク聞エ黃梅三更ノ傳衣
 風光顯赫タリ

此の室峯といふは前に申した嵩山少林寺の在る所にて、その山を少室峯と名けられてあつた故に達磨大師が少林寺に九年の間面を壁に向けて坐禪なされたことを九年の面壁と仰せられたのである。聲名遠く聞ゆるとは、その名譽が千載の今日この日本國裏にまで聞えて實に有名なものぢや。○黄梅三更の傳衣此れは是れまで聞いたことのない人には分りかねるであらうが、之を今此に委しく辨ずるといふもチト迷惑の至りと云ふべきなれど、概略だけでも話さないとい提唱にならぬ前にも申した如く、達磨大師より六代目の祖師を慧能禪師といふ、何れに優劣があるといふ譯てはなけれど、この禪師に至つて門風が殊に昌へたのである。此人の素性を洗つて見ると支那は葱嶺山の南に方る所に新州といへるがある、其處の百姓であつた、シカも貧乏な百姓で、作る田地も無ければ、毎日山奥へ木樵に行き、夫れを市町に賣代なして、一人の母と自分との度世を送りつゝ、あつた木樵親爺であつた其位ぢやから固より學問とてはない、されど宿善開發の時到れるにや、或日一客の金剛經を讀誦してをるのを立聞きせられ、應無所住而生其心といふの句に至り、非常に感悟せられ、最う堪らんものぢやから、御免下さい、貴公の只今讀みとられた經

文は如何なるを經て御座りますか、ハイ此れは黄梅縣黄梅山の弘忍禪師に授けられたのであります、して夫れは何ういふ人ですか、此れは天下の大善知識、達磨大師から五代目の方て門弟も惠來坊様ばかりが七百人も隨身してをられます云々、矢れから頻りに慕はしくなつて、御自分にも其處へ行きたくなつたのである、されど一人の母親があるのて非常に苦心せられたが種々に心配して四十兩の金子を拵へ、之を母の飯料に充行ひ、自分は適々黄梅山五祖禪師を尋ねて道を求められた禪師に相見の後、八ヶ月餘を經て新到の者なれど機縁此に契ひ七百僧中に抜群の氣象ありたるものと見ゆ、盧行者とて未だ身は俗人なりしも、佛心印を傳授するに堪ふべき大器と見込まれ、七百高僧の見聞を憚り、弘忍禪師は夜半の三更潜かに盧行者を方丈に呼び寄せ親しく心印を單傳し、且つ傳來の佛衣佛鉢を授けて夜の内に逃亡せしめられた故に、黄梅三更の傳衣と仰せられたのである、其後十五年の間跡を塵中に晦まし、時の宜しきを見計うて教化を曹谿山に揚げられたところ、道俗雲霞の好みに集ひ、破竹の勢ひを以て如來の大教を布演し、震旦の第六祖として青原南岳の二派を生じ、兒孫普ねく天下に滿ち涉つた、その盛大隆昌なる光景を形

容して風光顯赫たりと讃歎なされたのである

彼ノ俱胝ノ一指黃檗ノ三頓

此も亦支那にての故事、婺州金華山といふに俱胝和尚といふが居られた天龍和尚の開示に依て直指の宗要を認得せられ、凡そ學人の問ふ所あれば何時でも只一指を豎て、示され遷化に望みても我れ天龍一指頭の禪を得て一生受用し盡さずと一指を豎起して圓寂せられた此れにも委しい因縁があるけれど今は預りと致さう如何にあらんか是れ佛と問へば黙して一指を豎つ法と問ふも僧と問ふも都てその通り此れは又如何なる宗旨であらうぞ正覺禪師は毛端に刹海を飲むと頷せられた如何にも此の一指は蓋天盖地を盡せる一指頭である佛世尊の拈出せられた一枝の金鉢羅華と同様維摩居士が芥子の中に須彌を容るゝと論じたのも亦この宗旨である

黃檗禪師も亦凡そ學者の所問あるときは三十棒を與へられた頓とは頓速と申して問者の聲に應じ直に棒頭を行じられた臨濟慧照禪師が如何にあらんか是れ佛法的々の大意と問はれたれば三度とも三十棒を與へられた故に三頓とは三十棒

のことである且く道へ黃檗の意那邊にあるか、全本然通身親切であるにも拘はらず、他に向つて佛を求めたり法を求めたりするといふのが、罪過彌天ぢや、只この痛痒を知る底は、是れ何物ぞと自己に反省すれば、些子に較るのである

百丈ノ拂臨濟ノ喝

是れは南岳下の大宗匠にて禪林の規矩を開始せられた百丈山の大智禪師懷海和尚にて黃檗義運禪師の師匠馬祖道一禪師の弟子である、或時師の道一禪師が汝何の法を以てか人に示すぞと問はれたれば、海禪師之に答へて「拂子を豎起せられた之を百丈の拂と仰せられた

又臨濟希玄禪師此れは黃檗義運の法嗣にて、今日臨濟宗の開祖と稱せらるゝ人である、動もすれば大喝一聲せられた此等は何れも言宣不及意路不到の宗旨を顯揚せられたのであることを知らねばならぬ

洞山ノ麻三斤雲門ノ乾屎橛

洞山良价禪師此れは五位の法門を以て有名なる禪門中興の禪師である、或時學人の僧が如何にあらんか是れ佛と問ふたれば、麻三斤と答へられた、雲門山の文偃禪

師これは當時僧中の王と稱せられた、雲門宗の開祖である。此も亦如何にあらんか。是れ佛といへる僧の間に對して「乾屎橛」と答へられた、且く道へ其意那邊にあるてあらう。

未ダ生佛ノ階梯ニ拘ハラズ已ニ迷悟ノ邊際ヲ超ル者也

此れは俱胝の一指、黃蘗の三頓乃至洞山雲門の答所を結歸して未だと押へ佛と問ふたからとて、之に答へられたからとて、教相上に於ける衆生界と佛界との階梯即ち五十二位の階級をもて談ずるが如きものに拘はるべきものではないのである。己に階梯の函段や梯の上下に拘はるべきものではないとして見れば、勿論迷悟の邊際を超越してある生佛迷悟の俗諦門中の事にあらずとせば、絶對待なる眞諦門中の問答往來と看破しなくてはならぬ。達磨門下の曲調は何時でも眞諦門中無爲無漏の商量である。

何ゾ證悟ヲ他ニ待ツ者ノ影ヲ認メテ終ニ吾ニ非ズ知見ヲ躰ニ存スル者ノ塊ヲ遂テ未ダ人ノ爲ニセザル者ニ比セン乎

辨道話にも此法ハ人々分上ユタガニツナハレリトイヘドモ修セザルニハアラハレズ證セザルニハウルコトナシト仰せられた如く、この大法、この大道、この妙心、この眞佛なるものは、人々具足箇々圓成全體、本然通身親切、本來具有して居るのぢやもの、それを何ぞや、演若多が自分の頭が無くなつたとて、室羅城中を狂奔して求め探した如く、證悟を師僧に求めたり、佛菩薩に安心を授けて戴くなどと騒ぎ廻るものは鏡の中に映る影の畢竟吾身にあらざるものを認めて吾身ぢやと誤認し、爾うして又認むべからざる知見解會の妄分別を我躰に存置したり、又は狂狗に土塊を擲けつければ、人の投げつけたことを知らず、土塊が我に讎を爲したのぢやと誤認して頻りに其の土塊に噛みつくが如きものと比べものにはならぬ、或は念佛を申し眞言を唱へ、經文を讀誦し、菩薩の寶號を唱へなどして哀を他の佛菩薩に訴へ、他の慈光に照らされて證入開悟を待たり、又は一則の公案を拈提して頻りに悟入の早成を貪つたりしてをる様なものが夢にだも、麻三斤や乾屎橛の極意を領ずることとは出来ないのみならず、外道ぢや魔黨ぢやと誹謗をこそするてあらう。昔しは南泉斬猫の話頭を提撕して坐中に猫を幻見した族もある、又は狗子無佛性

の話則を提撕して大きな狗を坐中に幻見した愚僧もあるといふ事ぢや、或は彌陀を念じて彌陀を幻見し、地藏觀音を念じて其の容顏を幻見するが如きも、畢竟自身の幻影なることを知らず、利益を他に求むるが如き、未だ真禪に入らざる者の知見解會に過ぎざるものである。

已に全體本然として欠くることもなく、餘まることもなき自性天眞の本尊を持ちながら何が不足して他に求め貪るのであらうぞ、我身は煩惱具足の徒ら者ぢやの此の世界は厭ふべき苦婆娑であるとか、穢土であるとか、三界六趣の苦界であるとか、アタラ此の法身此の寂光土を嫌ひ賤みて、他方世界に淨土を求め、未來の世に成佛を期待するが如きは、生佛迷悟の邊際に驅馳するものにて、直指の旨は夢にだも知らぬ。

誠ニ夫レ佛祖單傳ノ旨言外領略ノ宗ハ先哲公案ノ處古
德證入ノ處ニ在ラズ

若し夫れ直指單傳の旨趣が文字語言の上に在りとせば、教者法師も能く此宗に入ることが出來さうなものぢやけれど、言外領略の宗旨であるから、南岳の慧思禪師

永嘉の玄覺大師、長沙の思璩、德山の宣鑑、太原の牟上座、亮座主の如き、何れも皆從來の所學を抛つて此の禪門に參じた實例が昭々として明かである、殊に德山の如き文字法師のチャキキにて即心是佛などといへる附佛法の魔黨を退治してやらねばならぬとて、龍潭和尚に參ずるの中路、餅賣の婆子に逢ひ、金剛經の一句で試験せられ口を開くことが出來なんだ、龍潭に到るに及び一夜にして悟入し、その翌日法堂の前衆僧の見る所にて所持の金剛經疏を提起し、諸ノ玄辯ヲ究ムルモ一毫ヲ太虚ニ置クガ如ク、世ノ樞機ヲ盡スモ一滴ヲ巨額ニ投ズルニ似タリと云つて、夫れを火中に焼却して仕舞はれた、此等は全く言外領略の宗旨を明らめられた著明の實例と云はねばならぬ。

若し又聰明博解を以て單傳直旨の佛道に入ることが出来るものならば、黃梅七百高僧の中に最も聰明博解の聞えありし神秀上座の如きは、正しく弘忍大師の付屬を得て宗門の第六祖と成らねばならぬ筈なるに、圖らざりき米搗をして居た廬行者が、潜かに其の付屬を得たのである、而も廬行者は一向に文字のなき人であつたけれど、深く言外領略の宗乘に達しられたから、之に如來の佛心印を傳付せられ

たのである

然らば香嚴擊竹悟道の端的を領會し靈雲桃悟の妙旨を研究して得らるゝのであらうか古へより香嚴の外に擊竹悟道したといふことを聞かぬ、靈雲より外に桃花を見て悟道した例證がない、或は趙州無字の公案が捌けたとか、香嚴樹上の古則が領會せられたとか云つたとて、夫等は影を認めて己れとなし、知解を珍重して佛法なりと誤認するの門外漢にて徒らに泥團を弄するの雜輩と云はねばならぬ、夫れこそ日夜他の寶を數へて自から半錢の分なしぢや

語句論量ノ處問答往來ノ處ニ在ラズ 知見解會ノ處思量

念度ノ處ニ在ラズ

然らば言句を多く覺て問答商量を巧みにし、善く文字章句に達して、批評論議が上手であれば、直指の宗旨を得たのであらうか、否々其んなことは悉く六識門頭の語言語にして取るに足らざるものぢや

然らば聰明博解を以て諸法の妙理を談じ、深思熟慮して佛祖の言句葛藤を解了すれば、單傳の宗旨が得られるかといふに、爾うでもない、若し然らば阿難尊者の如き

多聞第一の智辯を備へた人が何うして世尊の御在世中に悟入せられなんだのてあらうと、逆も觀念の智慧や道理の會解て契はぬからの事である

談玄談妙ノ處説心説性ノ處ニ在ラズ

華嚴天台法相三論俱舍成實真言淨土諸宗の如き玄を究め妙を盡し、心識の幽致法性の玄底に達して滴水も漏さず、喃喃々として口に説き筆に談ずるのであるけれど、夫れ只畫餅影像に過ぎぬ、實地に煩惱障を斷ずることも知らなければ、所知障を斷ずることをも知らぬ、只是れ聰慧の外道知解の凡夫たるを免かれぬとの祖意である

唯ガ這柄ヲ放ツテ留メザレバ瞥地當處ニ圓闍タリ故ニ能ク眼ニ滿ツ矣

這柄とは、コノエといふこと圓き器に附けてある手掛りの柄である、實は這の柄が餘計なものであるのぢや、何故かといふに、全體本然、至道無難、圓同太虛、無欠無餘なるものぢやに依て、這柄は畢竟無用である、一代時教も這柄である、古則公案も這柄である、知見解會、談玄談妙、すべて這柄である、打坐は乃ち是れ正法眼藏涅槃妙心な

りとある萬事を放捨し諸縁を休息して善惡を思はず是非を管ずること莫れ心意識の運轉を止め念想觀の測量を停めて作佛をも圖るなとある又言を尋ね語を逐ふの解行を休すべしともあるのは正身端坐非思量の全體を現成せしめんが爲めに外ならぬ實際理致には一塵を立せずとある縦ひ一塵一法でも這柄があれば身心脱落の當躰に背く全體本然通身無影像の端的に反くから這柄を放下して微塵毫末ばかりも留めざれば此時始めて瞥地當處に團圓たりや

瞥地とは過目なり暫視なり迅機僞逸なりともある團圓とは二字ともにマドカと訓む乃ちマンマルイ貌である十五夜の満月あれが満圓いのである

縦ひ絲久ばかりでも知解や分別の這柄があつては一圓相に缺くる處がある縦ひ一微塵でも語句論量の曇りがあつては團圓たる光明に障礙がある若し一切之を放下すれば蓋天蓋地放大地光明である故に能く眼に満つ玄沙禪師が盡大地沙門の一隻眼といひ又は盡十方世界一顆の明珠と云はれたのも正當恁麼の當躰を提唱せられたのである

腦後ニ豁開ス眞密ノ路面前不識好知音

豁とはホガラカと訓む何物が豁かに開いたのであらうぞ上の如く這柄を一切放下して見れば盲目の如く膝行の如く自由の利かぬ如く思はるゝならんかなれど爾うではない彼の八月十五夜の満月でも一切の曇りが霽れ渡つて内より其の光明を放つ如く耳を竹筒に換却し眼を圓月に換却し從前凡夫の肉眼を閉却してこそ始めて腦後に慧眼法眼が豁開するのであるこの向上の一路は凡夫二乗等の夢にだも知らざる眞實秘密の通路であるから二祖慧可大師も了々として常に知ると申された己に凡眼を閉却し意路を塞却して了ふたからには面前不識といふべきである古人が頂門に眼を具せよと云はれたのも此邊の消息である斯くの如く眼界に一法を留めず腦後に圓明なる心眼を豁開する底の人が眞に祖門の好知音である三世の諸佛と同牀に起臥し歷代祖師と同道唱和する底の人である

大師釋尊ノ正法眼藏 西天東地分付ン來ルコト多時也

界畔識ヲサルコト在リ

大師釋尊の大迦葉に分付せられた正法眼藏は恁麼の好知音にあらざれば單傳することが出来ぬ然るに西天二十八代東土二三および此の永平まで絲毫を増減せ

ずして分付し來つたので多時とは己に二千二百餘年に及んだからである。だが此の心田地は廣大無邊にして界畔の區劃が分らぬのである。この心田地より幾多の兒孫が生じ幾多の信徒が生じ幾多の轉大法輪が顯はれ幾多の伽藍淨財が得られたか算數の及ぶ所でない。自今永遠にまた何程菩提の苗が繁茂し涅槃の米が獲れるやも識るべからざるものである。

謂ユル分付シ來ルコト多時トハ這ノ一片ノ田地ナリ這ノ一片ノ田地トハ吾等ガ直下ノ田地ナリ古人コレヲ大道ト稱スル者歟

今日の我等は悉くも此の豊かなる無量無數の心田地を分付せられてあるのぢやから常に之に肥料を施し恒に之を護持して相續しなければならぬ田地といへば田地なれど又これを大道とも稱するのである。

既ニ多時ト云フ算數スルコト能ハズ籌量スベカラズ算盤に掛けて數ふことも出來ず籌竹を以て量ることも出來ないところの多時なりとせば勿々二千年や三千年の事ではない。甚大久遠百千萬億無量無數の昔し

空王佛の時より分付せられてあると云はねばならぬ

事舊リ時遙カシニテ四至界畔曉了ナラズト雖モ住持理就シテ保任日ニ新ナリ

さて大師釋尊の分付せられた此の一片の田地は七佛以前より保任し來らせたまひし所のものにて誰が開拓したのやら譲り受けたのやら夫れも判然せず四方の界だに曉了ならぬ。曉了ならぬが此の田地の本領である。此の田地があればこそ無始以來今日まで相續不斷である。吾に有る三昧我も亦知らず自己の心田地なれと邊際が知れぬ。知れぬ儘に久住護持し理就とオサメ就けて暫時も油斷なく保任任持して日々新に榮えつゝある併し田地であるから放任して置けば荒蕪するゆゑ年々月々日々夜々時々刻々に耕さねばならぬ

此日新ノ事自カラ際斷アリ

日に新なりとはいへ此中におのづから際限と斷片とがある。そは如何なる事ぞといふにと次の句に移る

中ニ就テ行アリ教アリ證アリ彼ノ行ト云フハ功夫坐禪

ナリ此行佛ニ到リテ尙ホ退カザルハ例ナリ佛行ニ被ム
ラシムル所以ナリ教證准シテ檢スベキ歟

此の日新月异の中に於ける際断といふは教行證の三事である此の三事は伊字の三點の如く修羅の三目の如く鼎の三足の如く離るべからざるもの行といへば萬行あれど此に唱へらるゝ所のものは坐禪の事である此の坐禪は佛行である佛行であるから佛に成る爲めに行ずるばかりでなく成佛の後も依然これを退かぬ果上の佛事である三世の諸佛も皆この通りで教證の二事も亦同一である

此ノ坐禪ハ佛々ノ相傳祖々ノ直指獨リ嫡嗣スル者ナリ

餘ハ其名ヲ聞クト雖モ佛祖ノ坐禪ニ同シカラズ

欲界外道宗中にも四禪八定といふがあり聲聞緣覺菩薩にも坐禪が無いではない有りはすれども我が佛祖門下に單傳し來れる所のものとは同日の論でない全然其の趣を異にしてをるから貴いのである

所以如何トナレバ諸宗ノ坐禪ハ悟ヲ待ツナ則ト爲ス譬
ヘバ船筏ヲ假リテ大海ヲ渡ルガ如シ將ニ謂ヘリ海ヲ渡

リテ船ヲ抛ツ可シト矣

餘宗他門に於て修する所は悟りを得るが爲の行業に過ぎざれど今は夫れと天淵の相違である

吾ガ佛祖ノ坐禪ハ然ラズ是レ乃チ佛行也

果上の佛に到るも尙ほ捨てたまはぬゆる佛行とは申したものの

謂ユル佛家ノ体タラクハ宗說行一等ナリ一如ナリ宗ハ
證ナリ說ハ教ナリ行ハ修ナリ向來共ニ學習ヲ存スル也

佛家の大體は何んなものであるかと尋ねて見れば宗說行の一如なるにあるので此内一を缺いても不具的の佛法となるのである而して宗とは證なりとある證はサトリと訓ひサトリは其心に得るのである是れは即ち自覺である說とは教なりと教とは他に向つてヲシフルのであるから利他行である行とは修なりて此れは身に行ずるのである而して

行ハ宗說ニ行ズルナリ說ハ宗行ヲ說クナリ宗ハ說行ヲ
證スルナリ行若シ說ヲ行ゼズ證ヲ行ゼズンバ何ソ佛法

ナ行ズト云ハンヤ説若シ行ヲ説カズ證ヲ説カズンバ佛
 法ヲ説クト稱シ難シ證若シ行ヲ證セズ説ヲ證セスンバ
 爭カ佛法ヲ證スト名ケン當ニ知ルベシ佛法ハ初中後一
 ナリ初中後善ナリ初中後無ナリ初中後空也這ノ一段ノ
 事未ダ是レ人ノ強テ爲スニアラズ本自カラ法ノ云爲也
 此の御垂示は別に辯解を要しない様である、只善なり無なり空なりとある處に深
 く留意すべきである、無は無相にして空は平等である、此の教行證は佛法の体た
 らくとしておのづと斯くあらねばならぬのである

既ニ知又佛法ノ中ニ於テ教行證アリトイフコトナ一刹
 那ノ田地多時ナラズト云フコト無シ

既に初中後一なりとある如く、修と説とが今生に屬して證が未來永遠の後に得ら
 るゝといふのでは一と云はれぬ、修の時には證説が具備し證の時には行説が無く
 てはならず、説の時には行證が無くてはならぬ、三事が同時に具備するから初中後
 一なりと仰せられた、既に同時に具備するから、一刹那の田地と云ふべきぢや、一刹

那は極短時である、極短時の中に宗説行の三事が具備するのであるから因果同時
 である、長短同時である、生佛一如である、故に一念萬年といひ、十世古今當處一念と
 もいふ、是くの如く無量劫に貫通する一念なるが故この心田地は三世不可得であ
 る、不可得不可稱の三世である、三世といふも長遠時にあらず、頓速時にあらず、只是
 れ直下不可得の田地にして四至界畔曉了ならずである

日來貴ム所ハ中間ノ樹子也惜ムベカラサル有リ

中間の樹子此れはソモ何んな樹子であらうぞ、根を金輪際に張り、枝を十方無量土
 に張り、爾うして蓋天蓋地を蔭涼してをる、三世の諸佛も之に依て阿耨菩提を成就
 し歷代祖師も之に依て正法輪を轉じられつゝある、一切衆生も亦之に依て行住坐
 臥してをるので、誠に豊富なものぢや

教既ニ是クノ如シ、行モ亦是クノ如ク、證モ亦是クノ如シ

此の三事ともに無盡無間斷不可思議不可稱量である

正當恁麼自ノ管得、自ノ管不得ヲ管セズ、教ヤ行ヤ證ヤ所
 通達ノ處、豈佛法ニ非ザルコトヲ得ンヤ

教といふ時には三乘十二分教及び一切の言教皆この中に含まれてをる故に教外別傳などと唱へて經教を撥棄すべきものでない一切の言教は悉く佛祖の遺身舍利である圓明國師も五戒八戒菩薩の大戒比丘の具戒三千の威儀八萬の細行諸佛菩薩の轉妙法輪皆この坐禪の中より現前して盡ることなし萬行の中最勝の實行は只是れ坐禪の一門なり僅に修して一步の功徳を進むるときは百千無量の堂塔を造るに勝れりと讚歎なされた如く三世の諸佛歴代祖師も皆この三昧を以て正行と爲して居らるゝのであるからこの一行に近達すれば萬行に通達するのであるこの行を行じて何にするのであらうかこの教を敷衍して何にするのであらうぞ自他同じく期する所のものは阿耨多羅三藐三菩提に證入するが爲めである古徳の曰く直趣無上菩提且く之を恁麼といふ正當恁麼之を全體本然通身親切道本圓通至道無難といふ圓同太虛無欠無餘といふこの田地を所有しこの田地を耕しこの田地を護持しこの田地を一切衆生に分付して受用不盡ならしむるもの之を直指單傳の活佛法といふ諸子宜しく之を保任せられよ

通俗禪語第一篇(畢)

明治四十一年九月十日印刷
明治四十一年九月廿日發行

通俗禪語集付

定價金卅錢送料四錢



著者 高田道見
發行者 永田顯了
印刷所 東京市京橋區大鋸町十四番地
北澤活版所

發行所

東京芝區愛宕町一丁目十六番地
振替口座番號二九四六

佛敎館

出雲寺 文次郎

東京

鴻盟社 敎盟堂
森江本店 誠心堂
全分店 東京堂
光融館 東亞堂

京都 出雲寺 文次郎
全 貝葉書院
全 法藏館
尾張 文光堂

特約發賣

佛 教 館 發 賣 書 目

高田道見	神谷篤倫	佛教講話	赤澤智善	望月	向井教遠	無我山房	各宗大家	全	全	全	全	全	高田道見	松浦百英	南條博士	足立栗園	堀内新泉	全	全	全	全	加藤咄堂	藤田長江	白田石南	加藤弘之
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
正信無常觀	禪の要術	婦人の物語	聖典	淨土の聖訓	佛陀の言行	偉人の言行	佛敎各宗綱要	佛敎問答集	疑問解答集	通佛敎安心話	從容錄講話	佛敎人生論	連座說教	歎異鈔講話	心身鍛鍊養氣法	人格と運命	修養資料話し草	心の研究	冥想の辯論	雄辯	佛敎演說軌範	福澤翁言行錄	西郷南洲言行錄	迷想的宇宙觀	
四五六	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二	一八二
二六	二八	六六	四六	四六	四六	四六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
法然	親鸞	諸葛	道元	伊藤	日蓮	釋實乘	石村貞一	鈴木大拙	達磨大師	鴻盟社	安藤鏡麿	全	全	高田道見	若生形山	釋宗演	建仁管長	森江發行	加藤咄堂	全	法藏館發	忽滑谷	全	川合清丸	西有穆山
上	上	孔	禪	仁	上	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
人行錄	言行錄	言行錄	言行錄	言行錄	言行錄	歡喜天隨願記	護法賢聖傳	佛陀の福音	少室六門論	禪學評論	修身讀本	連月說教	菩薩戒落草談	禪學一席話	寒山詩講義	金山剛講義	禪剛經講義	修養小機	布教大寶鑑	全	法藏館發	忽滑谷	大和魂	譯陰陽錄	學道用心集提耳錄
二五	三五	三五	三五	三五	三五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
四四	四四	四四	四四	四四	四四	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六

佛 教 館 發 賣 所

東京芝罘愛宕町六丁目

自治協會	○摸範自治村	三五	四
報知新聞	○少年武士道第一	四〇	六
全	○少年武士道第二	四〇	六
破魔禪	○偉人修養史	五〇	六
冠註	○學道用心集	三〇	六
冠註	○華嚴原人論	三五	六
首書傍訓	○天台四教義	三五	六
全	○坐禪義用心記合本	二五	六
全	○金剛經畧疏	五五	六
古田梵仙	○宏智禪師頌古	八〇	六
全	○釋門字千金集	六〇	六
玉林祖香	○澤庵廣錄	一〇	六
秋庭貞山	○吉祥草	一〇	六
大内居士	○禪學評論	一〇	六
現代家代	○曹洞在家日課要集	一〇	六
松崎覺太	○教育と宗教の關係	一〇	六
元良博士	○武士道	一〇	六
鐵舟口述	○禪門法語集	一〇	六
山田孝道	○精禪門法語集	一〇	六
森大狂	○佛敎和讃三百題	一〇	六
蓮窓居士	○修養資料はなし草	一〇	六
咄堂新著	○九星易學秘密傳	一〇	六
石館由典	○坐禪用心記落草談	一〇	六
畔上禪師	○禪學活問答	一〇	六
鴻盟社	○日本禪宗史要	一〇	六
孤峯鳥石		一〇	六

榮嚴僧正	○密宗安心敎示章	四五	二
古屋鐵石	○驚神の大魔術	四五	二
瀧谷琢宗	○正法眼藏開顯事考	一五	二
加藤咄堂	○雄辯學大意	三五	二
岸上恢嶺	○說敎惟中策	三五	二
加藤咄堂	○佛敎要義	一三	二
三文學士	○釋迦史傳	四〇	二
新佛敎編	○來世の有無	二〇	二
京都出來	○碧岩集小本	六〇	二
全	○禪林句集	二七	二
村上博士	○人生の要路	四〇	二
加藤咄堂	○應用修辭學	七五	二
大内青巒	○原人論講義	三二	二
境野黃洋	○日本佛敎史要	三〇	二
高田道見	○禪門常用經典	三六	二
揖東正彦	○海舟言行錄	六〇	二
安部正人	○鐵舟言行錄	六五	二
原僧運	○禪學早わかり	四五	二
勝峯大徹	○禪と長壽法	四五	二
大内居士	○新井白石言行錄	四〇	二
清澤滿之	○佛敎の根本思想	五〇	二
全	○精神講話	三〇	二
全	○信仰と修養	二五	二
伊藤俊道	○信仰坐談	三五	二
	○釋迦實傳記	六五	二

發賣所 東京市芝區愛宕一丁目 佛敎館

釋悟庵	○禪と武士	三五	四
大月長安	○觀音上人講義	四〇	六
望月黒田	○法然上人全集	四〇	六
十屋於教	○日本文學史	一〇	六
榮嚴和上	○密宗安心敎示	一〇	六
秘說秘術	○九星易學研究	一〇	六
村上博士	○佛敎研究秘傳	一〇	六
鴻盟社	○四節引論	一〇	六
催眠協會	○驚神の大魔術	一〇	六
天桂禪師	○碧嚴講義	一〇	六
大内居士	○全華經講義	一〇	六
織田得能	○法華經講義	一〇	六
境野黃洋	○和讃三問講義	一〇	六
西有穆山	○支那佛敎史	一〇	六
大内青巒	○辨道三講義	一〇	六
大内青巒	○禪宗安心の義	一〇	六
足立栗園	○偉人證義	一〇	六
孤峯鳥石	○人參禪聞録	一〇	六
前田博士	○本禪宗史要	一〇	六
元龍童	○如本上人	一〇	六
元町吞空	○平心大	一〇	六
町元吞空	○注平心	一〇	六

道見和譯	○觀音小大經	一〇	六
梶川乾堂	○俱舍論大綱	一〇	六
高田道見	○婦人論大綱	一〇	六
大内青巒	○般若心經講義	一〇	六
全	○佛敎研究講義	一〇	六
全	○修證義引導法語	一〇	六
竺山默禪	○曹洞二師錄	一〇	六
古田梵仙	○坐禪義用心記合本	一〇	六
吉田義山	○大乗佛敎大綱	一〇	六
加藤咄堂	○大乗佛敎大綱	一〇	六
全	○忘然の妙	一〇	六
南條博士	○自忘然の妙	一〇	六
石川成章	○楞嚴の妙	一〇	六
南條博士	○楞嚴の妙	一〇	六
南條博士	○曹洞宗諸經要録	一〇	六
南條博士	○靜信偈講義	一〇	六
前田博士	○正信偈講義	一〇	六
山田孝道	○證導歌講義	一〇	六
全	○信心銘講義	一〇	六
全	○坐禪義用心記	一〇	六
文會堂發	○真宗學典全書	一〇	六
大内居士	○禪學三	一〇	六
八十八翁	○西有禪	一〇	六

發賣所 東京市芝區愛宕一丁目 佛敎館

高田道見 見主幹 施佛 佛敎館 法輪 眞如界 定價等 佛敎館

時代思想に應ずる唯一の新聞

目録毎頁 要目載下 目録毎頁 要目載下

高田道見主幹

高田道見師著

- 天竺●佛教人生論(三版)代二圓卅錢●送料不要
- 三版●通俗觀音經講話 代一圓卅錢●十二錢
- 三版●菩薩戒落草談 代十五錢●二錢
- 三版●連月說教 代三十錢●六錢
- 新著●禪學一夕話 代六錢●二錢
- 近刊●通俗佛教便覽 代六十錢●八錢
- 再版●從容錄講話 代四圓●不要

松浦百英師述

連座說教 代一圓卅錢 送料二十錢

加藤咄堂居士

佛教演說軌範 代十四錢 送料六錢

發行所 東京芝區安町一ノ六 佛教館

通俗佛教新聞

定價

▲壹部參錢▲郵稅
▲拾壹錢▲半ケ年分九
▲拾壹錢▲壹ケ年分
▲拾壹錢▲拾貳ケ年分

佛教館

(振替口座二九四六)

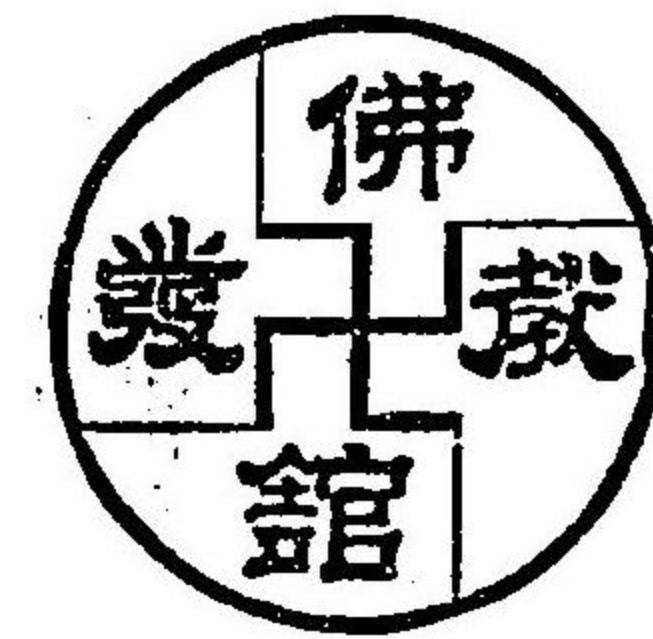
大乘起信論講話

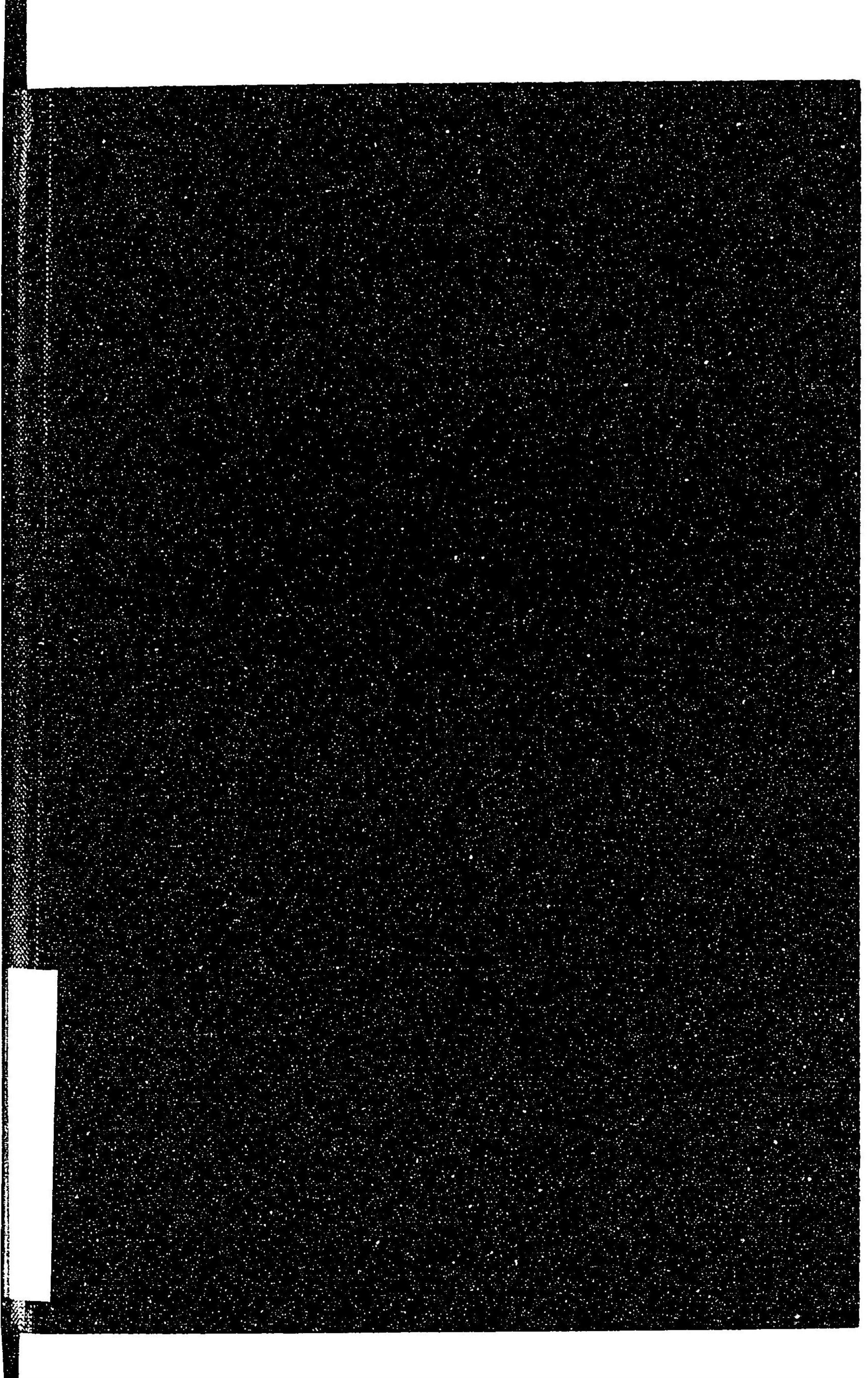
●修養欄 ●大内居士●米馬琢道●稻葉清秋●漢詩●學圃
●社論●評林 ●松浦百英 主筆 高田道見

現今の宗教問題

●水曜講話 ●飯塚玉山 記者 數名山
●佛敎小説 ●加藤咄堂居士

●發行所 ●本紙明治廿七年創刊 ●週刊にして既に七百號 ●地盤鞏固主義堅確 ●教界唯一の文壇佛學の ●獨家内として ●座右の銘として ●家庭の寶として





特18

769

通俗禪話

1

国立国会図書館

019737-000-0

特18-769

通俗禪話

高田 道見/著

M41.9

ABG-0542

